三宅廃寺3

－福岡市埋蔵文化財調査報告書第827集－

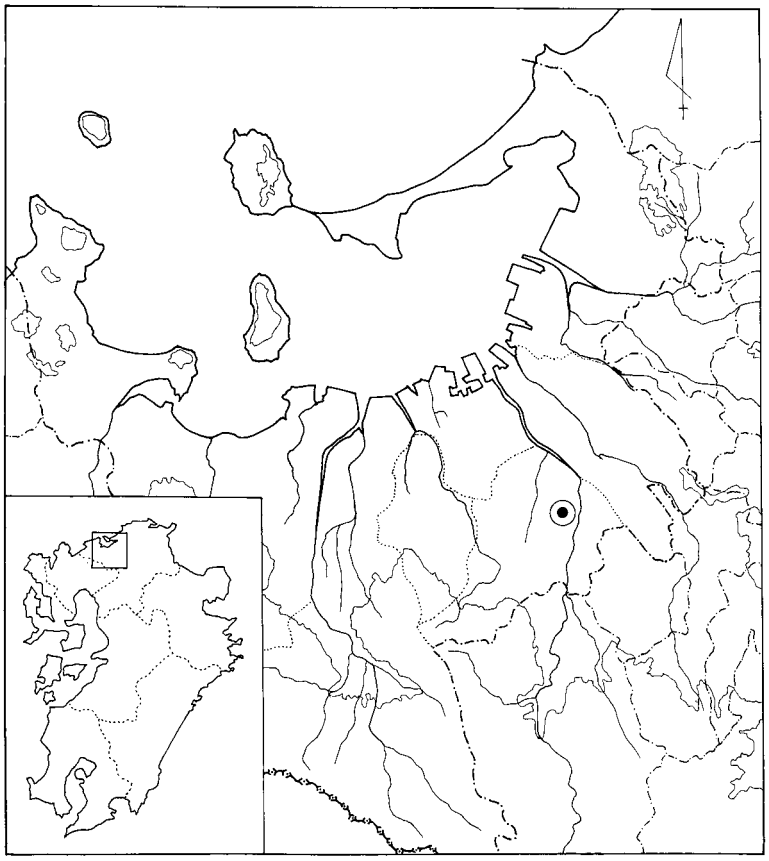
2004

福岡市教育委員会

三宅廃寺3

－個人専用住宅建設に伴う三宅廃寺第３～5次調査の報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第827集



２００４

福岡市教育委員会

序

福岡市は，古来より大陸との文化交流の門戸としてその歴史的役割を担い，発展してきました。そのため，本市には数多くの文化遺産が残されております。これらを保護し，後世に伝えていくことは私どもの責務であります。

本市教育委員会では，各種開発事業に伴い消滅するおそれのある埋蔵文化財については，記録保存を目的とした発掘調査を行い，それらを後世に残すよう努めています。

本書は，個人専用住宅建設工事に伴って実施した三宅廃寺第３次～第５次調査の成果を報告するもので，古代寺院跡と推定される寺域の一角を確認するとともに，須恵器や土師器，瓦類などが出土しました。これらは，地方における初期仏教の受容の在り方を知る上で貴重な資料となるものです。

本書が，文化財保護に対する理解と認識を深める一助となり，また学術研究の資料として大いにご活用いただければ幸いです。

最後となりましたが，発掘調査の実施から本書の作成に至るまで，深いご理解とご協力を賜った関係者の皆様に対して，心から謝意を表します。

平成16年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　　生田　征生

例　言

1．本書は，個人専用住宅建設に先立ち，平成14年度事業として国庫補助を受けて福岡市教育委員会が実施した三宅廃寺遺跡第３～５次調査の発掘調査報告書である。
2．調査番号は第３次が0249，第４次が0250，第５次が0251である。
3．掲載した遺構番号は各調査区毎の通し番号とした。
4．遺物番号は，調査区に関係なく通し番号とした。
5．遺物についての説明は概括的に各遺構単位で行った。個々の遺物については，遺物観察表を参照されたい。
6．本書で使用した地図は，国土地理院発行の25,000分の１地形図「福岡西南部」，福岡市発行の5,000分の１都市計画図「39　三宅」である。
7．本書で図示した方位はすべて磁北である。
8．本書で使用した造成計画図面は，大和ハウス工業株式会社福岡支店作成の事業計画図から提供を受けた。
9．本書に掲載した遺構及び遺物関係図は田中壽夫が実測，製図を行い，遺物写真については，大塚紀宜が撮影した。
10．本調査に係る記録類及び出土遺物は，本市埋蔵文化財センターに収蔵保管される。
11．本書の執筆・編集は田中が行った。

本文目次

Ⅰ．はじめに …… 1
　１．調査に至る経過 …… 1
　２．調査の組織 …… 1
Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境 …… 2
　１．三宅廃寺の位置と歴史的環境 …… 2
　２．既往の調査 …… 2
Ⅲ．発掘調査の記録 …… 4
　１．発掘調査の概要 …… 4
　　１）　調査区の位置 …… 4
　　２）　各次調査の成果概要 …… 4
　２．第３次調査 …… 5
　３．第４次調査 …… 7
　４．第５次調査 …… 10
Ⅳ．結　語 …… 18

挿図目次

第１図　三宅廃寺第３～５次調査地点と周辺遺跡(1/25,000) …… 3
第２図　三宅廃寺第３～５次調査地点位置図(1/5,000) …… 3
第３図　三宅廃寺第１～５次調査検出遺構配置図(1/500) ……(折り込み)
第４図　溝 SD01断面実測図(1/40) …… 5
第５図　第３次調査区遺構平面及び土層断面図(1/80) …… 6
第６図　溝 SD01・02土層断面図(1/40) …… 7
第７図　第４次調査区遺構平面及び土層断面図(1/80) …… 8
第８図　第４次調査区出土遺物実測図（１）(1/3) …… 8
第９図　第４次調査区出土遺物実測図（２）(1/5) …… 9
第10図　第５次調査１区西壁土層断面図(1/80) …… 10
第11図　第５次調査区遺構平面及び土層断面図(1/80) …… 11
第12図　第１次・５次調査区遺構配置図（1/250) …… 12
第13図　土坑 SK02・04・08，柱穴 SP20，溝 SD01平面及び断面図(1/40) …… 13
第14図　第５次調査区出土遺物実測図（１）(1/3) …… 13
第15図　第５次調査区出土遺物実測図（２）(1/3) …… 14
第16図　第５次調査区出土遺物実測図（３）(1/5・1/3) …… 15
第17図　第５次調査区出土遺物実測図（４）(1/3) …… 16

図版目次

図版扉　　三宅周辺航空写真(昭和53年当時)
図版１(1)　第３・４次調査区調査前現況(北から)
　　(2)　第５次調査区調査前現況(南西から)
図版２(1)　第３次調査区完掘状況(南東から)
　　(2)　第４次調査区完掘状況(南東から)
図版３(1)　第５次調査第１区完掘状況(南西から)
　　(2)　完掘状況(南南西から)
　　(3)　土坑 SKO ２(南南東から)
　　(4)　土坑 SK01(東から)
　　(5)　土坑 SK08(南南西から)
図版４(1)　第５次調査第２区完掘状況(南西から)
　　(2)　溝 SD03(南から)
　　(3)　柱穴 SP20(北から)
　　(4)　第３次埋め戻し状況
　　(5)　第４次埋め戻し状況
　　(6)　第５次埋め戻し状況
図版５　出土遺物

表　目　次

表１　第４次調査区出土遺物観察所見表…… 9
表２　第５次調査区出土遺物観察所見表……17
表３　調査報告書抄録　(奥付)

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経過

平成14年11月１日付けで，福岡市南区南大橋１丁目1157番７及び同1157番８，並びに同1159番３における住宅建設に先立ち，埋蔵文化財の有無について照会があった。いずれも，本市文化財分布地図上で三宅廃寺(登録番号0144)として登載されている周知の埋蔵文化財包蔵地内に位置している。また，近隣地においては，民間共同住宅建設に伴う三宅廃寺第１次調査(昭和52年度実施)や，福岡県住宅供給公社旧南大橋団地跡地の宅地造成事業に伴う第２次調査(平成14年度)が実施されており，何らかの遺構が存在することが予想されたために，平成14年11月５日及び11月８日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果，いずれの地点からも奈良時代を中心とした遺構と遺物を検出したため，盛り土あるいは基礎構造の設計変更等による現状保存を依頼した。しかし，地盤が軟弱であり，耐震構造に万全を期すために基礎杭の打設工事が必要なことから，協議の結果，やむを得ず記録保存を目的とした発掘調査を行うこととし，平成14年11月28日から約１ヶ月の期間で，三宅廃寺第３～５次調査として実施することとした。

なお，事前審査受付番号，試掘調査番号及び調査番号は下記のとおりである。

	受付番号	試掘調査番号	調査番号	申請及び調査地点所在地
三宅廃寺第３次調査	14－２－545	14－179	0249	福岡市南区南大橋１丁目1157番７
三宅廃寺第４次調査	14－２－546	14－180	0250	福岡市南区南大橋１丁目1157番８
三宅廃寺第５次調査	14－２－544	14－178	0251	福岡市南区南大橋１丁目1159番３

２．調査の組織

以上の経過を経て，発掘調査は以下の組織で国庫補助事業として実施した。

工事主体者　川野　晃(福岡市南区南大橋１丁目1157番７)
榎屋真一(福岡市南区南大橋１丁目1157番８)
吉井健也(福岡市南区南大橋１丁目1159番３)
調査主体　福岡市教育委員会　教育長　生田征生
調査総括　埋蔵文化財課長　山崎純男
事前審査　事前審査係長　池崎譲二
主任文化財主事　米倉秀紀
文化財主事　田上勇一郎
調査担当　調査第２係　田中壽夫
調査庶務　文化財整備課管理係　御手洗清
調査作業　松永シゲ子　山崎光一　嶋ヒサ子　野口ミヨ　持丸玲子　森田祐子
長田嘉造　野田淳一　宮崎タマ子　西田文子　山内　恵　平川正夫
佐藤俊治

なお，調査の実施及び整理報告書作成にあたっては，施工業者である大和ハウス工業株式会社福岡支店から条件整備，図面提供等の協力を，また，川野章氏を初めとする工事主体者の皆様方には，発掘調査の実施にあたり深いご理解とご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境

１．三宅廃寺の位置と歴史的環境

福岡平野と早良平野を画する油山山塊は，多くの低丘陵を派生させながら平尾周辺から，若久，桧原，老司等にかけて起伏に富んだ地形を形成している。一方，背振山から東南麗から派生した那珂川は，背振ダム・南畑ダムにいったん流入した後北東流し，深く谷を開析しながら那珂川町を経由した後，中流域で肥沃な沖積平野を形成しながら，本市南区へ流下する。さらに三宅～大橋周辺においては，福岡平野の中央部を占める那珂洪積台地に阻まれ大きく北西に流路を変え福岡平野の中央を経て博多湾に流れこんでいる。この那珂川中流域左岸に形成された沖積平野と台地縁辺部にかけて，野多目Ａ・Ｂ遺跡群，国指定史跡老司古墳，老司瓦窯跡，大橋Ｅ遺跡等の縄文時代から中世にわたる遺跡が点在しており，福岡平野南部において，比較的分布密度の高い地域となっている。

今回調査の対象となった三宅廃寺(0144)は，１.三宅遺跡群(2825)に包含されている。三宅遺跡群は，東西に約500m，南北に約250m の広がりを有し，主として奈良～平安時代の遺跡によって構成されている。範囲内には２.三宅瓦窯跡(0142)，４.三宅岩野瓦窯跡(0143)等の瓦窯跡，古代瓦類の散布地である大橋Ｄ遺跡(0134)，弥生時代の甕棺が出土したことで知られる３.大橋Ｃ遺跡(0133)，三宅廃寺推定の端緒となった三宅Ａ遺跡(0135)が分布している。東側沖積微高地には，弥生時代の集落遺跡の他，古代官衙の存在が推定される６.大橋Ｅ遺跡(2382)，整然と並んだ掘立柱建物がかつて確認されたという７.三宅Ｂ遺跡(0139)などが近接している。((　)内の数字は遺跡登録番号である)

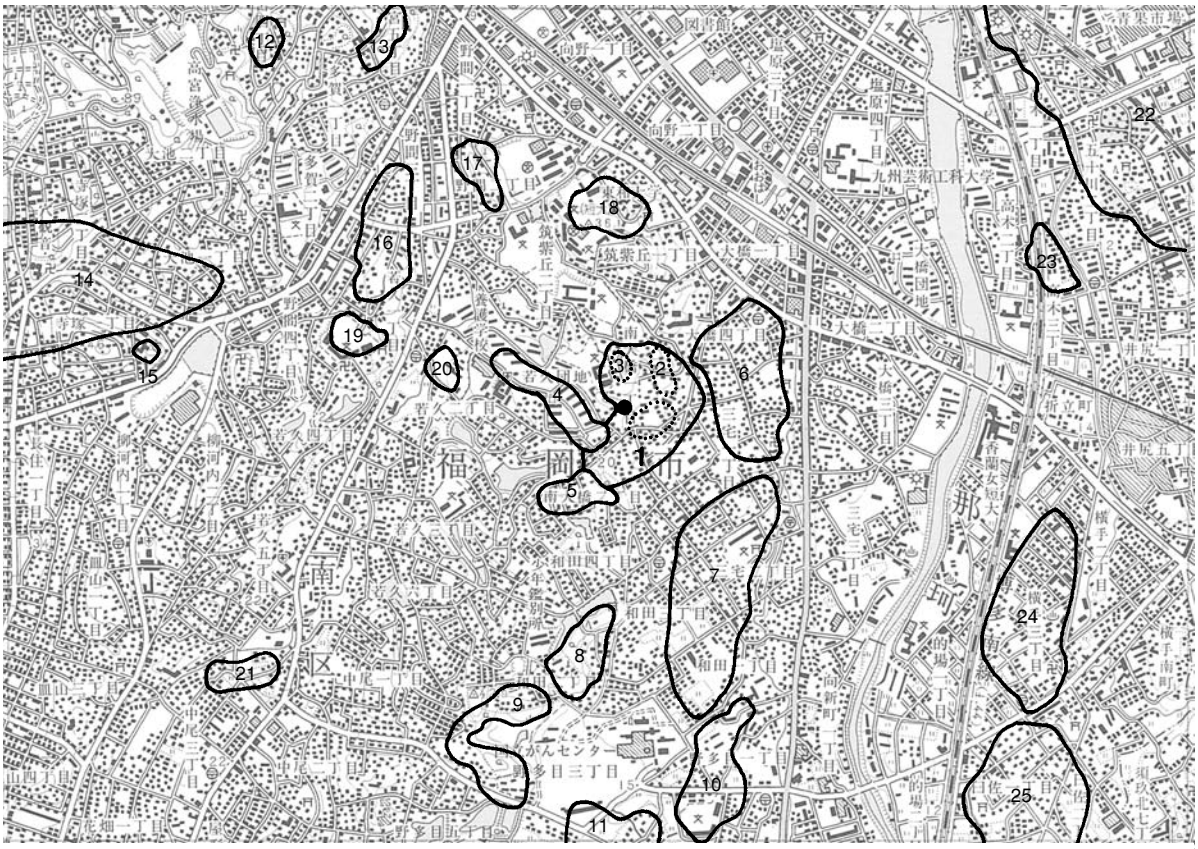
２．既往の調査

三宅廃寺の存在について，初めて考古学的に推定したのは，昭和52年11月～53年３月にかけて実施された三宅Ａ遺跡における民間開発事業に伴う発掘調査によってである。約1,200㎡の調査の結果，南北方向に整然と配された３間×３間の大型掘立柱建物，総柱建物，これらの建物を画する大小の溝，土坑等の遺構が確認された他，老司Ⅰ式を主体とする瓦類，磚，中国産陶磁器や,「寺」「佛」等の銘がある墨書土器，木簡，石帯巡方，黄銅製匙・箸等が出土した。寺域の推定は，周辺の古代瓦の分布状況及び調査区西側で確認された瓦溜遺構の在り方等から，大溝の東北部コーナーとみなし，方一町(約104～110m)程度の規模と推定するとともに，寺域の中心的施設は，当時の福岡県住宅供給公社南大橋団地の範囲内に想定した。

その後，平成14年１月～５月にかけて，南大橋団地跡地の再開発(宅地分譲)に伴う発掘調査が実施された。発掘調査は，新設道路部分に限られたが，第１次調査で確認された諸施設の方向性とよく合致する大型の掘立柱建物，溝，土坑等が検出された。特に東西棟及びそれに直交する南北棟の掘立柱建物群が確認されたことは，寺域範囲，規模の推定等の妥当性を検証する成果として重要である。

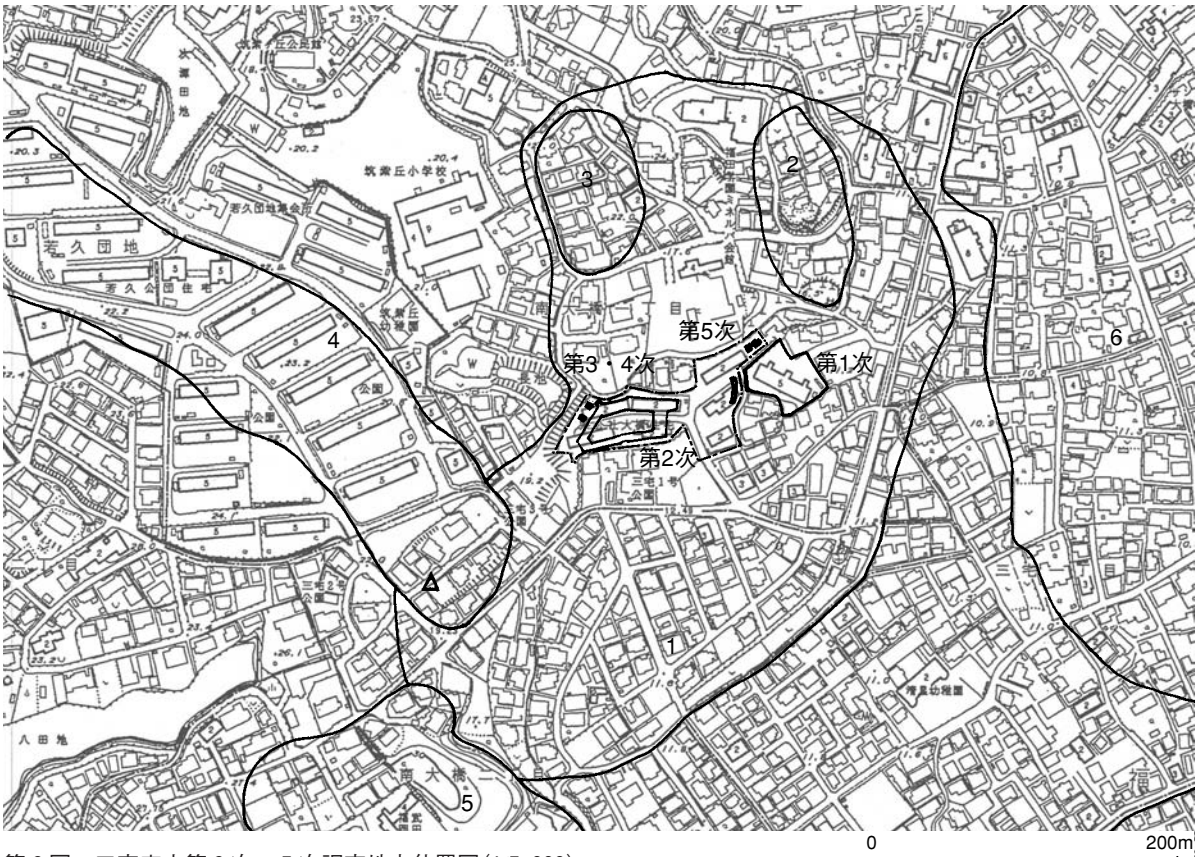
なお以下に，三宅廃寺関係及び周辺遺跡に係る本市埋蔵文化財調査報告書を掲げる。参考にされたい。

福岡市教育委員会　1979　『三宅廃寺』福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集
福岡市教育委員会　2004　『三宅廃寺２』福岡市埋蔵文化財調査報告書第826集
福岡市教育委員会　1990　『公園関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第219集
福岡市教育委員会　1992　『大橋Ｅ遺跡３次調査の報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第279集
福岡市教育委員会　1997　『大橋Ｅ遺跡４』福岡市埋蔵文化財調査報告書第511集
福岡市教育委員会　2003　『大橋Ｅ遺跡５』福岡市埋蔵文化財調査報告書第740集
福岡市教育委員会　2004　『大橋Ｅ遺跡６』福岡市埋蔵文化財調査報告書第791集



第１図　三宅廃寺第３～５次調査地点と周辺遺跡(1/25,000)

1．三宅遺跡（三宅廃寺）2．三宅瓦窯跡　3．大橋Ｃ遺跡　4．大橋Ｂ遺跡　5．和田田蔵池遺跡　6．大橋Ｅ遺跡群　7．三宅Ｂ遺跡　8．和田Ａ遺跡群　9．和田Ｂ遺跡群　10．野多田Ａ遺跡群　11．野多田Ｂ遺跡群　12．高宮Ａ遺跡　13．高宮Ｂ遺跡　14．寺塚Ａ古墳群　15．寺塚Ｂ古墳群　16．中村町遺跡　17．野間Ａ遺跡　18．野間Ｂ遺跡　19．若久Ａ遺跡　20．若久Ｂ遺跡　21．屋形原遺跡　22．那珂遺跡群　23．井尻Ａ遺跡群　24．横手遺跡群　25．日佐遺跡



第２図　三宅廃寺第３次～５次調査地点位置図(1/5,000)

Ⅲ．発掘調査の記録

１．発掘調査の概要

１）調査区の位置（第２・３図，図版扉・１～３）

県住宅供給公社南大橋団地跡地の再開発は，敷地4,458㎡を18区画の戸建て分譲用地として造成するもので，新設道路部分については約1023.⁵㎡について調査を実施した（三宅廃寺第２次調査）。

今回の第３・４次調査区は分譲計画地の北西部にあたり，北西から南東方向に開析された谷の開口部中央に立地している。現地表面における周辺の台地頂部との比高差は３～４ｍをはかり，本来はかなり狭い谷地形であったものと思われる。第５次調査は分譲計画地の北東部に位置している。当該地点は，本来，北西から南東方向に延びる尾根の末端部に位置している。対象地の南東側縁辺には農業用貯水池長池から延びる用水路が南西から北東に流下しており，それに接して第１次調査区が位置している。

第３～５次調査区は，第１次調査の結果推定された三宅廃寺推定域の外周部縁辺部に相当する地点であり，当該地点の旧地形の復元，すでに確認されている奈良から平安時代に比定されている溝や建物等の遺構群の分布状況等を明らかにすることを調査目的として実施した。

２）各次調査の成果概要

(1) 第３次調査

調査地点は，建売分譲計画地の北西部にあたる。第２次調査区の西側に接している。後世の攪乱が顕著で遺構の遺存状況はきわめて悪かった。

検出した遺構は，溝１条，及び柱穴２である。寺域推定の西側にも奈良時代の遺構がわずかではあるが存在していることがわかった。

(2) 第４次調査

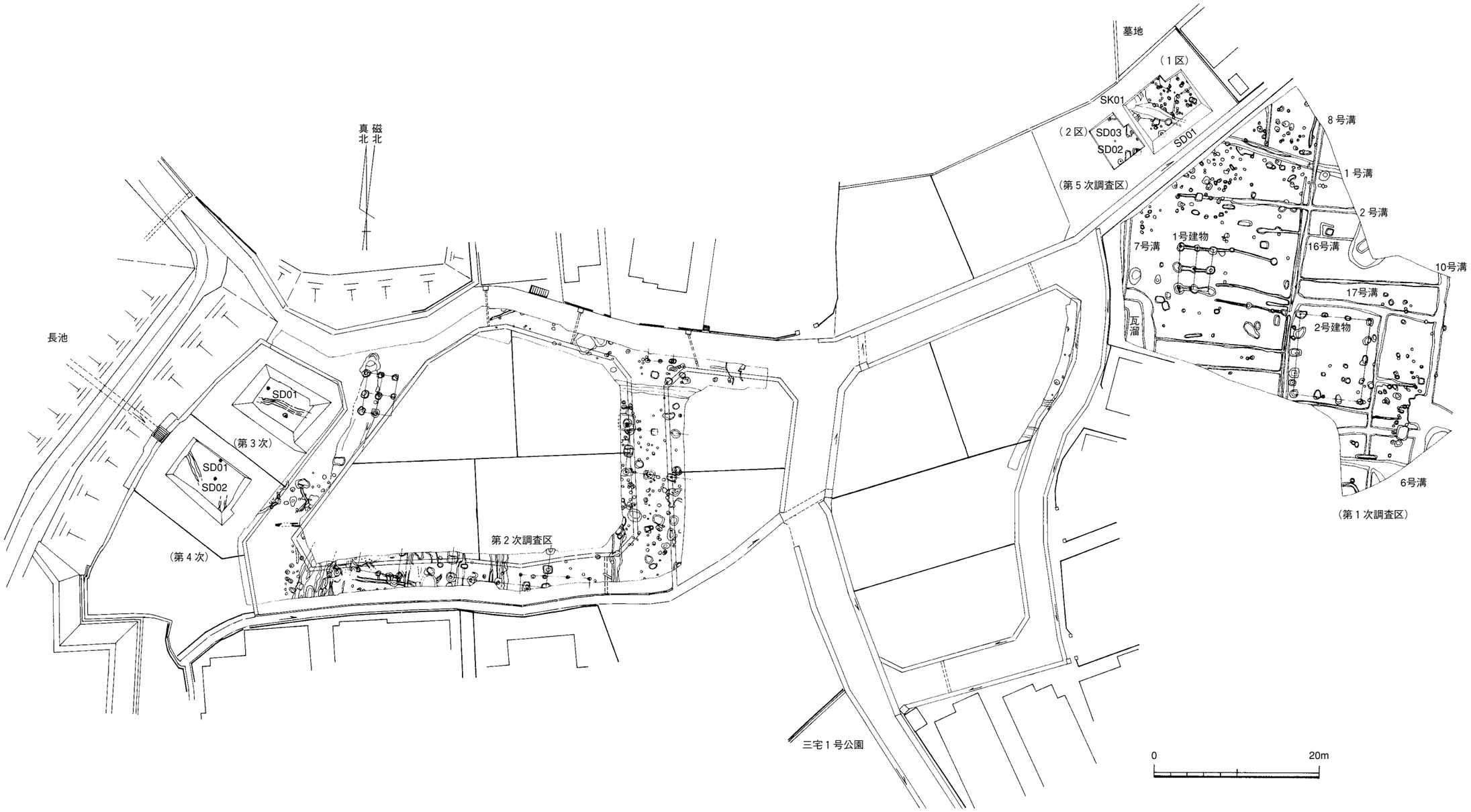
第３次調査区の南側に隣接している。第３次調査区と同様遺構のほとんどは削平されており，遺存状況は悪い。検出した遺構は溝２条，及び柱穴２である。第１次調査で推定された廃寺の推定域よりもさらに西側に遺構が展開することが予想された。

(3) 第５次調査

検出した遺構は，溝２条，柱穴多数，焼土坑，円形土坑などである。溝は第１次調査で確認された１号溝及び７号溝の延長部が確認できた。柱穴は大型の掘立柱建物のものもある。第１次調査成果と併せて，区画割りされた施設の一角について明らかにすることができた。遺物中に「寺」「十二」銘のある土師器，須恵器がある。

第３次調査風景（南東から）

第５次調査風景（南西から）



第3図　第1～5次調査遺構配置図(1/500)

2．第３次調査

調査は，分譲計画地北西部の一区画178.8㎡を対象に，63.8㎡について調査を実施した。当該地点は，本来，北西から南東方向に開析された谷部の開口部にあたり，谷最深部中央から北側斜面上に位置している。現況は，農業用貯水池長池の堤の東側に隣接しており，旧南大橋団地が存在していた頃の地盤面より1.5m以上の盛り土がなされ，造成後の地表標高は15.3～15.6mを測る。なお，調査区は第２次調査区西側と第４次調査区北東側に隣接する。

１）遺構と遺物（第２～５図，図版１～２）

遺構の検出面は，部分的に残る遺物包含層（黒灰色粘質土）下部に堆積する，きめ細かな砂粒を含む灰色～青灰色シルト層上面である。おおむね標高12.8～13.2m前後を測る。この層の下には，厚さ70cm以上の灰色粗砂層が厚く堆積している。その下部は砂礫となり，湧水が顕著である。県公社団地の建築及び解体工事の影響で，掘削は地山までおよび，遺構の遺存状況は悪い。検出した遺構は，溝１条，及び柱穴２である。

溝 SD01　幅が約40～50cm，深さ10～15cmを測る。長さ約５mについて確認した。溝の基底部がかろうじて残った状況である。断面形は浅皿状で，暗灰色シルトを埋土とする。溝の走向は西北西から東南東で，N-108°-Eを測る。第１次調査で検出された東西溝１号溝の走向N-110°-Eに近い。土師器，須恵器，瓦小片が出土している。いずれも２次堆積で磨耗し，図示し得るものはないが，8世紀半ばから後半代の遺物と思われる。

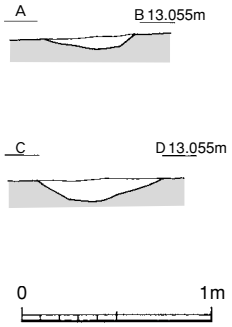
柱穴 SP01　柱掘形は不整円形である。径40cm，深さ10cmを測る。暗灰色～黒灰色粘質土を埋土とする。土師器，須恵器小片が出土している。いずれも磨耗し，図示し得るものはない。

柱穴 SP02　柱掘形は隅丸の不整な矩形である。一辺が58～70cmを測り，東南隅に直径26～28cmの柱痕跡がみられた。柱痕跡は黒灰色粘質土を埋土とし，瓦が出土している。柱掘形の規模等からみて，東側に接する第２次調査区で検出した掘立柱建物SB01と同規模の建物の存在が考えられる。

盛土状況（南東から）

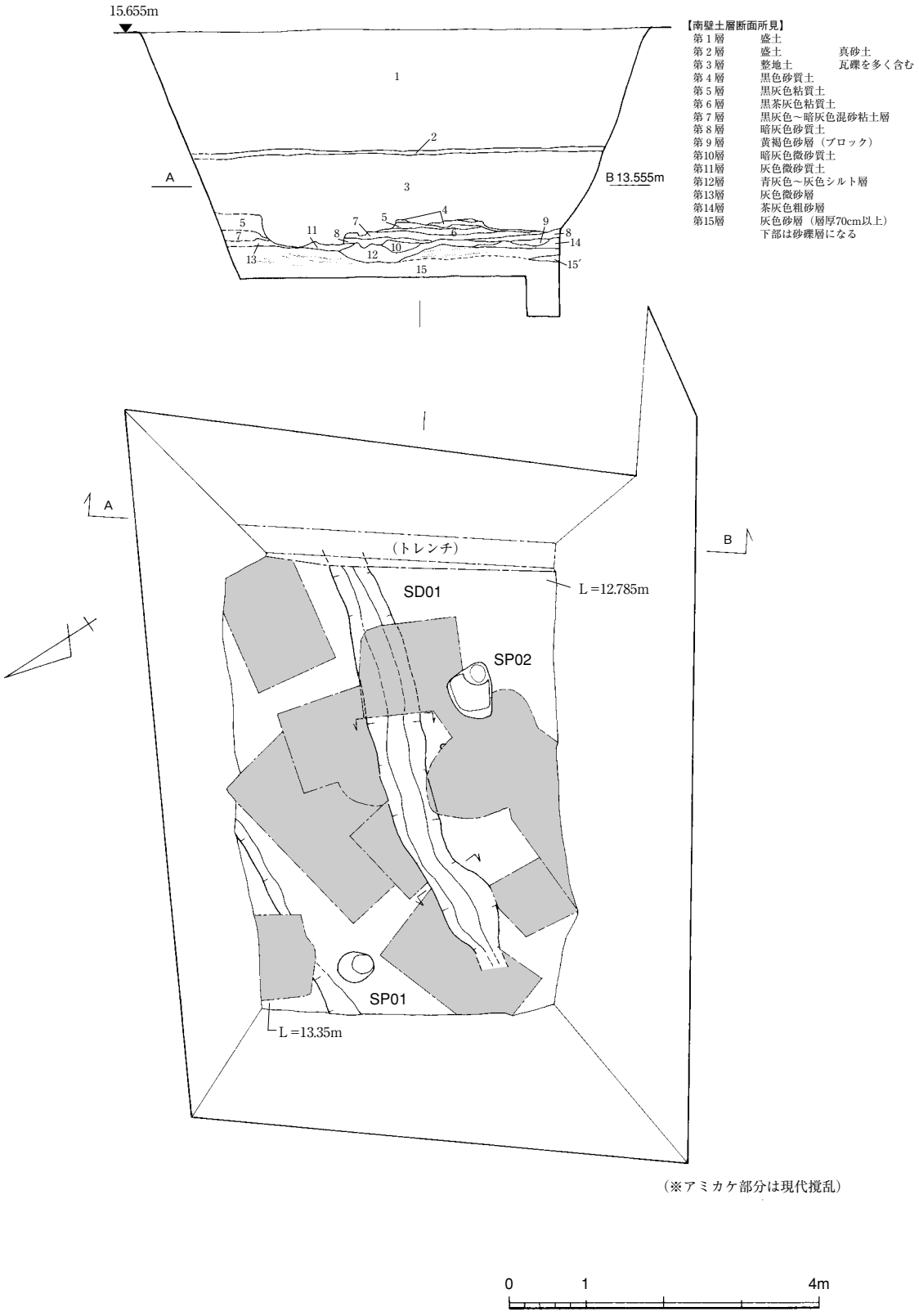
２）小結

本調査区は現代の攪乱が著しく，また，調査面積狭小であったこともあり，遺構遺物はわずかな確認にとどまった。本調査区及び第２次調査で検出された遺構分布のあり方からみて，奈良時代を中心とした時期の遺構が，さらに本調査区の西側に展開していた可能性を指摘できる。



第４図　溝 SD01断面実測図（1/40）

SD01（東から）



第５図　第３次調査区遺構平面及び土層断面図(1/80)

３．第４次調査

調査は，分譲計画地北西部の一区画174.47㎡を対象とし，72.2㎡について調査を実施した。当該地点は，第３次調査区と同様，本来，北西から南東方向に開析された谷部の開口部にあたり，谷最深部中央に位置している地点である。現況は，農業用貯水池長池の堤の東縁に隣接しており，旧南大橋団地が存在していた頃の地盤面より0.5m 以上の盛り土がなされ，造成後の地表標高は14.3～14.4m である。なお，調査区は第２次調査区西側と第３次調査区南西側に隣接する。

１）遺構と遺物（第２・3，6～９図，図版２）

遺構の検出面は，調査区北側に部分的に残った遺物包含層（黒灰色混砂粘質土）下部の砂粒を含む灰色～青灰色シルト層上面である。おおむね標高13.2～13.4m を測る。北から南に緩やかに傾斜している。この層の下には，厚さ約30cm の黒灰色粘質土があり，さらにその下部には少なくとも50cm 以上の灰色粗砂層が堆積している。基盤層は砂礫層である。第３次調査区と同様，県公社団地の建築及び解体工事の影響で，掘削は地山までおよび，遺構の遺存状況は悪い。検出した遺構は，溝２条，及び柱穴２である。

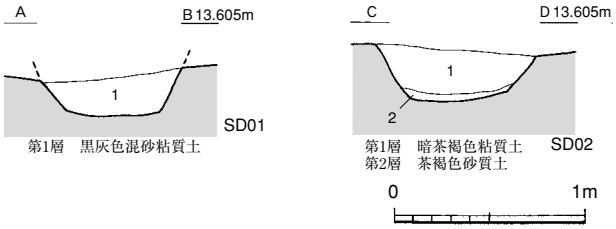
遺物包含層　調査区の中央から北西隅にかけて，硬く締まった黒灰色混砂粘質土が約10cm ほどの厚さでみられた。瓦片を主として土師器・須恵器の小片が多く出土している。いずれも小片のために図示できたのはわずかであるが（第８図１～９），主に８世紀代半ばから後半と思われる須恵器の小片である。瓦片は，格子目叩きを凸面に残す平瓦が主で，老司式丸瓦瓦当片も出土している。

須恵器（１～９）　いずれも宝珠形のつまみを有する坏蓋である。口径は14.0～15.0cm に，器高は1.0～2.0cm ほどにおさまるもので，口縁端部が明瞭な稜線をもって引き出されている。

溝 SD01　幅が約70cm，深さ15～20cm を測る。長さ約1.3m について確認した。北側延長部は現代攪乱のため消滅している。断面形は逆台形で，黒灰色混砂粘質土を埋土とする。溝の走向は北から南で，N－6°30′－E を測る。第１次調査で検出された東西溝７・８・10号溝の走向 N－7～8°－E に近い。第３次調査 SD01とは図面上で復元すると約75°の角度で交差する可能性がある。

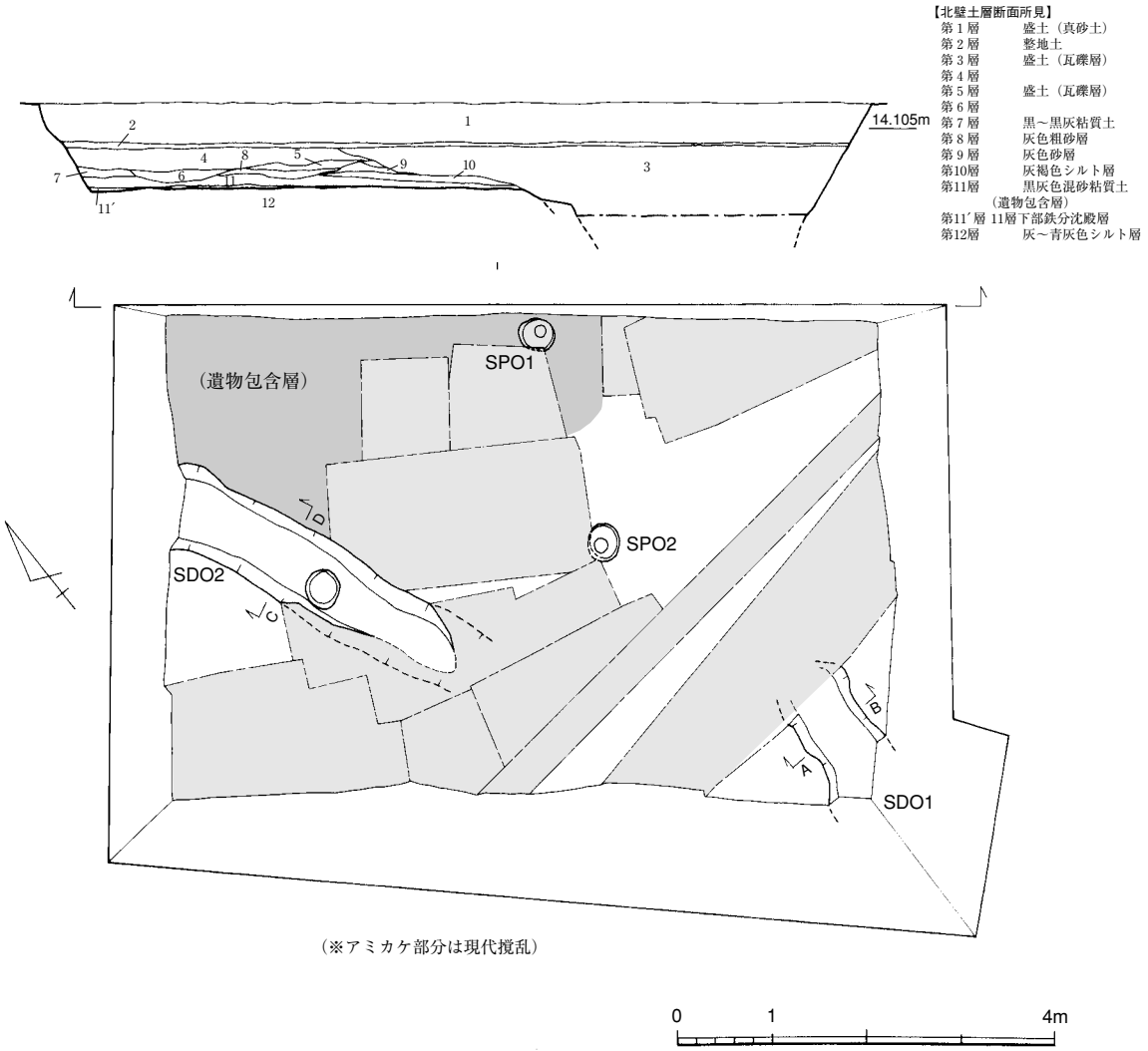
出土遺物はほぼ完形になる平瓦10が１点出土したのみである。凹面には布目圧痕が，凸面には縄目叩き痕が残る。縄目叩き痕は中央から上端にかかる範囲は磨り消されている。両側縁，上下縁はヘラケズリによる調整。

溝 SD02　幅約40～50cm，深さ10～25cm，長さ約４m について確認した。遺物包含層を切っており，溝 SD01よりも後出のものと思われる。溝の走向は北西から南東方向で，N－163°30′－E を測り，谷が開く方向とほぼ平行しており，第１次及び第２次調査で確認された建物群等の方向とは大きくずれている。溝断面形は逆台形で，暗茶褐色粘質土を埋土とする。土師器，須恵器が少量，縄目及び格子目瓦（平瓦）が出土している。いずれも２次堆積である。



第６図　溝 SD01・02土層断面図（1/40）

調査区北側溝 SD02検出状況（南東から）



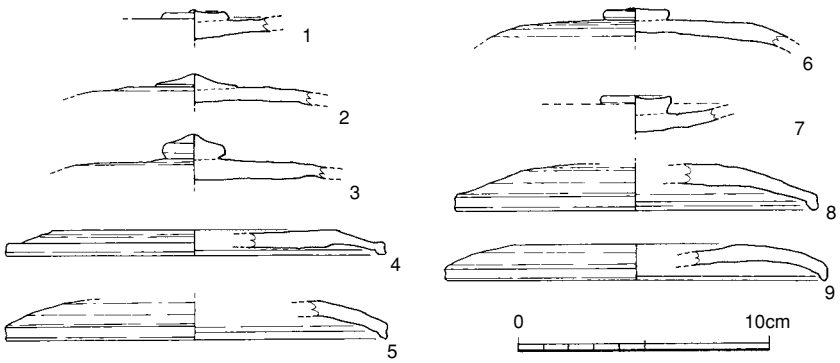
第７図　第４次調査区遺構平面及び土層断面図(1/80)

柱穴 SP01・02　遺物包含層を切っている。柱掘形はいずれも円形で，径25～30cm を測る。

２）小結

本調査区は，第３次調査区と同様，ほぼ全面にわたって撹乱がおよんでいたため，確認できた遺構・遺物はわずかであり，遺存状況もよくなかった。

したがって，本地点の遺構の密度等の本来の状況については明確でないが，検出された遺構の内，SD01はその方向性と埋土等の共通性からみて，第１次，第２次調査で確認された奈良時代の遺構群の一つであろうと考えられる。その他の遺構については，時期がやや下る可能性がある。



第８図　第４次調査区出土遺物実測図（1）(1/3)

第９図　第４次調査区出土遺物実測図（2）（1/5）

表１　掲載遺物観察所見一覧表（第４次調査）

掲載番号	遺構・層名		遺物名		部位	法量（cm）				胎土	焼成	色調	器面調整・成形上の特徴	備考
	遺構	層位	種類	器種										
1	—	北側包含層（黒灰色砂質土）	須恵器	坏蓋	天井部	口径	—	宝珠径	2.4	0.5mm前後の砂粒を含む。精良	良く焼き締まっており，硬質	灰色	天井部内面は横ナデ	—
						器高	—	宝珠高	0.9					
						天井部径	—	—	—					
2	—	北側包含層（黒灰色砂質土）	須恵器	坏蓋	天井部	口径	—	宝珠径	2.9	0.5mm前後の砂粒を含む。精良	良く焼き締まっており，硬質	灰～暗灰色	天井部内面は横ナデ	—
						器高	—	宝珠高	0.5					
						天井部径	—	—	—					
3	—	北側包含層（黒灰色砂質土）	須恵器	坏蓋	天井部	口径	—	宝珠径	2.4	0.5mm前後の砂粒を含む。精良	良く焼き締まっており，硬質	灰色	天井部内面は横ナデ	—
						器高	—	宝珠高	0.9					
						天井部径	—	—	—					
4	—	北側包含層（黒灰色砂質土）	須恵器	坏蓋	天井部	口径	15.0	宝珠径	—	0.5～1.0mm前後の砂粒を含む。精良	良く焼き締まっており，硬質	暗灰色	天井部外面はヘラケズリか	—
						器高	1.0～	宝珠高	—					
						天井部径	11.4	—	—					
5	—	北側包含層（黒灰色砂質土）	須恵器	坏蓋	天井部	口径	15.1	宝珠径	—	微細な砂粒を含む。精良	良く焼き締まっており，硬質	灰色	天井部外面はヘラケズリか	—
						器高	1.6～	宝珠高	—					
						天井部径	10.2～	—	—					
6	—	北側包含層（黒灰色砂質土）	須恵器	坏蓋	天井部	口径	—	宝珠径	2.6	0.5mm前後の砂粒を含む。精良	良く焼き締まっており，硬質	灰色	天井部外面はヘラケズリ，回転ナデ	—
						器高	—	宝珠高	0.5					
						天井部径	—	—	—					
7	—	北側包含層（黒灰色砂質土）	須恵器	坏蓋	天井部	口径	—	宝珠径	2.8	0.5mm前後の砂粒を含む。精良	良く焼き締まっており，硬質	灰色	天井部内面は横ナデ	—
						器高	—	宝珠高	0.6					
						天井部径	—	—	—					
8	—	北側包含層（黒灰色砂質土）	須恵器	坏蓋	天井部	口径	14.6	宝珠径	—	0.5～2.0mm前後の砂粒を含む。精良	良く焼き締まっており，硬質	灰色	天井部外面はヘラケズリ，回転ナデ	—
						器高	1.8～	宝珠高	—					
						天井部径	8.0～	—	—					
9	—	北側包含層（黒灰色砂質土）	須恵器	坏蓋	天井部	口径	15.2	宝珠径	—	0.5mm前後の砂粒を含む。精良	良く焼き締まっており，硬質	灰色	天井部外面はヘラケズリ，回転ナデ	—
						器高	1.5～	宝珠高	—					
						天井部径	9.4～	—	—					
10	溝 SD01	黒灰色砂質粘土層	瓦	平瓦	一部欠損	現存長		38.7		2.0～3.0mmの砂粒を多く含む。	良く焼き締まるがやや脆い	黒灰色	表面　布目 裏面　縄目	両側縁はヘラキリ
						現存幅		31.1						
						厚さ								

４．第５次調査

調査は，分譲計画地北東部の一区画276.11㎡を対象として，1区と２区に分けて92.7㎡について調査を実施した。当該地点は，本来，北西から南東方向に延びる尾根の末端部に位置している。第１次調査区は南東側に位置している。現況地表面(標高13.5m)を基準にすると第１次調査区とは約1.3m ほど一段高くなっている。

１）遺構と遺物(第3，10～17図，図版３・4，表２)

遺構の検出面は，硬く締まった基盤土である黄褐～明褐色粘質土である。検出面の標高は11.8～12.1m を測り，おおむね北西から南東に向けて緩やかに傾斜している。調査区北東側には，暗褐～暗灰褐色粘質土が５～15cm ほどの厚さで分布し，奈良期の遺物を多く含んでいる。SK02等の一部の遺構はこの包含層を切っている。遺構の遺存状況は第３次・４次調査区と比較し良好であるが，調査区南西側は攪乱が顕著である。検出遺構は，溝３条，土坑４基及び柱穴54である。

溝 SD01　２区南西隅から東側中央にかけて確認された。西北西から東南東へ延びている。幅1.2～1.9m，深さ0.45～0.5m を測り，断面形は逆台形である。埋土は大きく２層に分かれる。第11図１区土層断面図では第21層下面が基底面となり，東側に向かって低くなっている。第１次調査で検出された１号溝の延長部にあたる。

遺物は第１層下部で比較的多く出土した。土師器坏，皿，椀，甕，須恵器の他，瓦が出土している。いずれも２次堆積で磨耗しており，図示できるものは少ない(遺物観察所見は表２を参照されたい)。

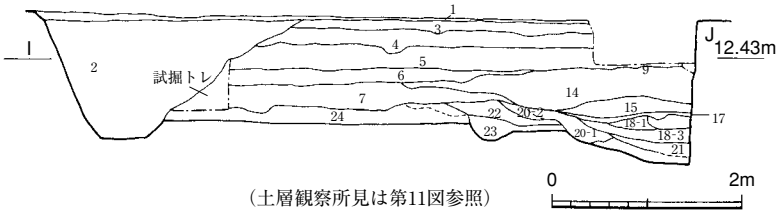
土師器　坏11は，内底と外底にヘラ記号「十」がみられる。14は体部が直線的に引き出される。皿12は体部はかなり外傾し大きく開く。13の底部はヘラミガキされている。椀16・17はいずれも高台部である。16は体部と高台が一体的である。体部は直線的に外傾するものと思われる。17は高台が斜めに広く引き出されている。体部はやや丸みを持つか。甕18・19の体部内面は斜方向のヘラケズリが施され，口縁部との境は明瞭である。

須恵器　瓶15は底部片である。底部外面は回転ヘラキリ後軽くナデている。

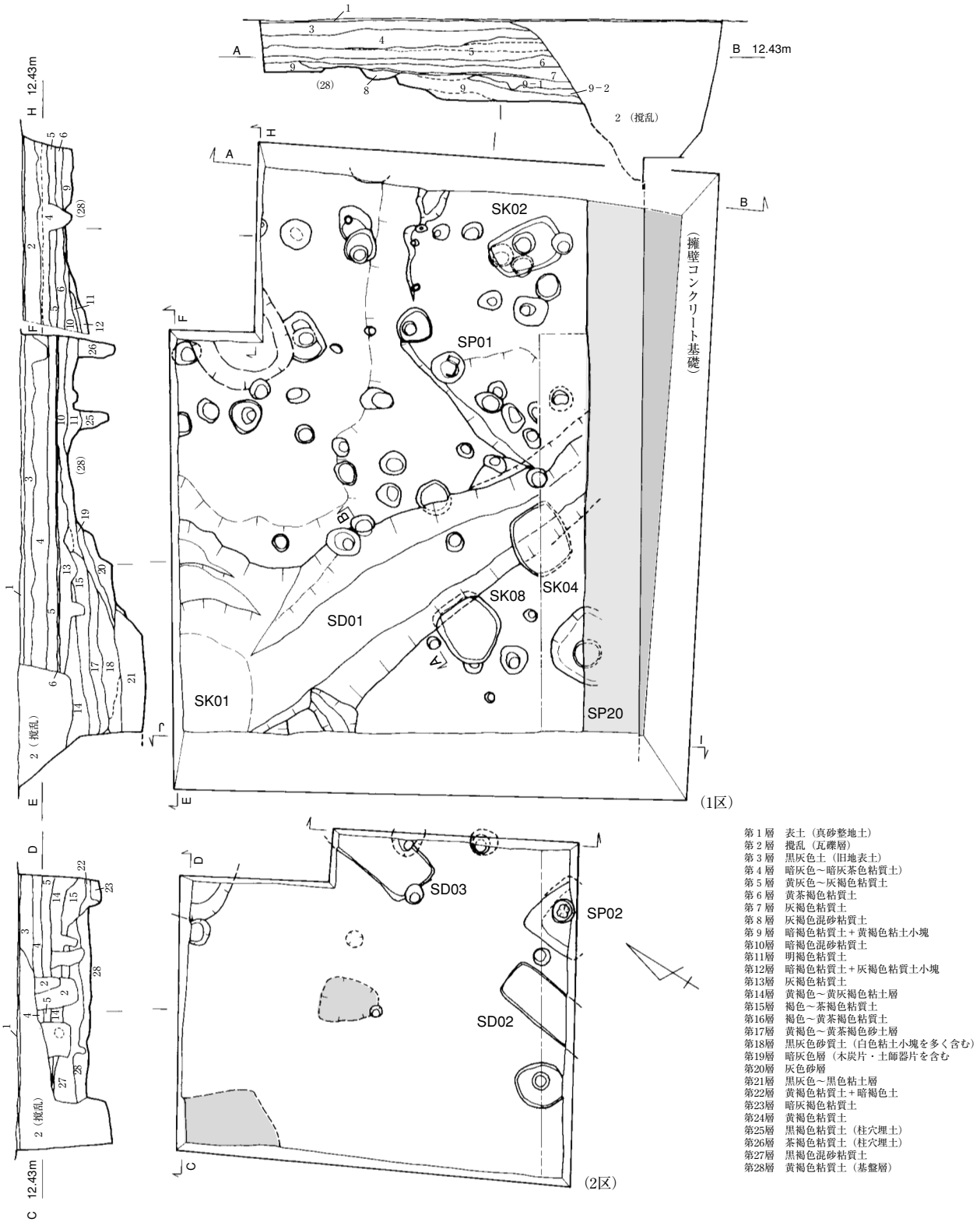
溝 SD02・03　２区北壁から東壁にかけて検出。幅0.6～0.7m，深さ0.1～0.25m を測る。上部は削平されており遺存状況は良くない。いずれも埋土は茶褐色粘質土である。SD02は第１次調査７号溝の延長部と考えられ，SD03とは1.72m の間をもってほぼ同一方向のＮ－６°－Ｅをとる。遺物は土師器の小片が出土している。

土坑 SK01　１区南西隅と２区北西隅にかかる。平面形は不整な直径約４ｍほどの円形である。第11図１区土層断面図の第18層下面が基底面である。遺構検出面からの深さは約80cm。断面形は浅皿状である。掘形北壁は階段状となっており，湧水点を利用し溝 SD01と並行もしくはその後に掘削されて併せて使用された水利施設と考えられる。遺物は北東壁側にまとまって土師器・須恵器・瓦片・鞴羽口が出土。ほとんどが小片である。

土師器椀20は高台部片である。坏21・22・24・25・33・34はいずれも底部は回転ヘラ切り離しであるが，24は底部から体部下端の成形は回転ヘラケズリ。口径は22が16.2cm，他は12.9～13.5cm にほぼおさまる。皿35は18層から出土。口径16cm。底部は回転ヘラ切り離しによる。甕23・27～29はいずれも体部内面の成形はヘラケズリによる。23・27は小型である。内黒土器椀26の体部はやや丸みを帯びる。口縁は肥厚しわずかに外反する。外面は下半までヘラケズリにより成形され，墨書で「十二」の銘がある。須恵器坏蓋30は４層



第10図　第５次調査１区西壁土層断面図(1/80)

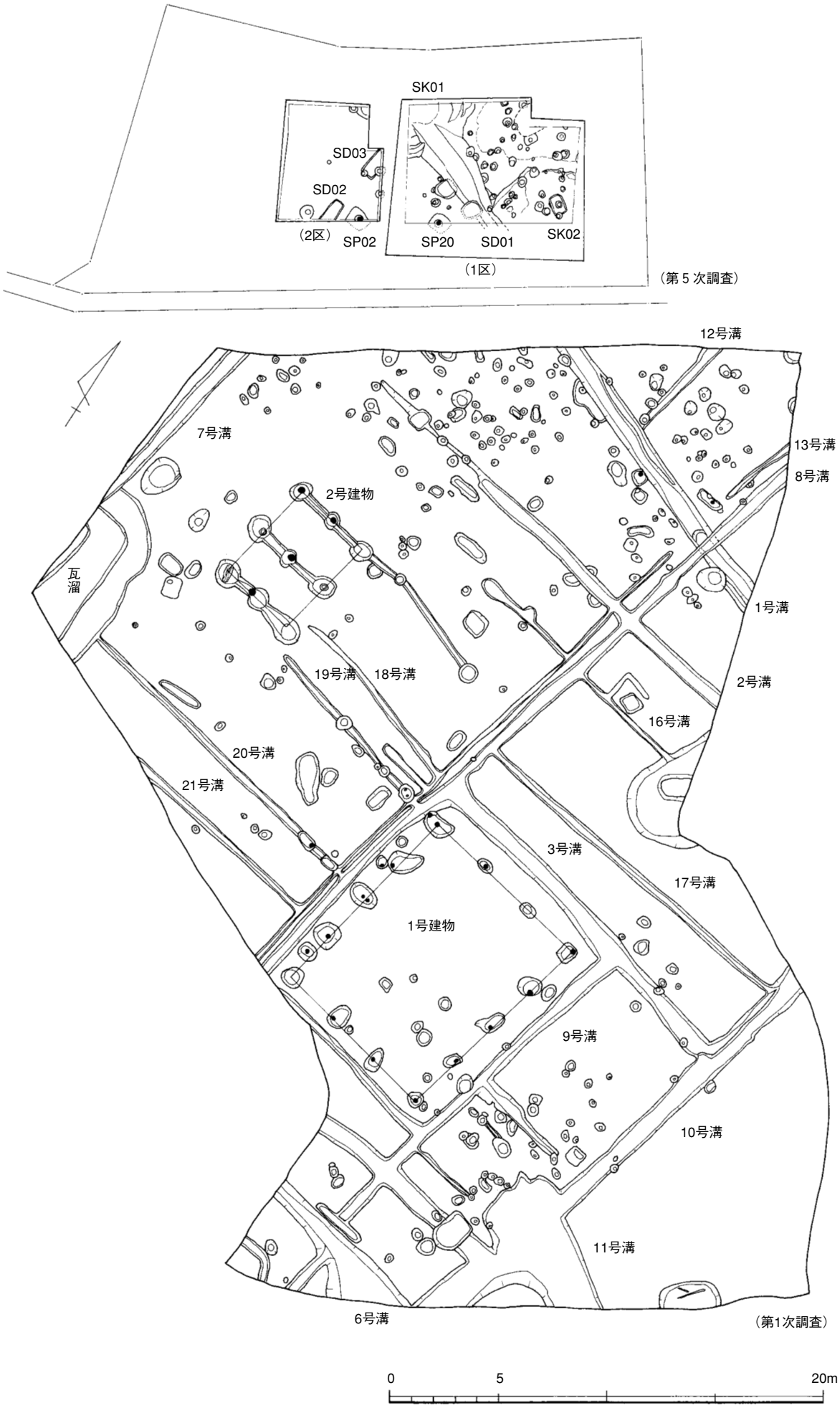


第１層　表土（真砂整地土）
第２層　撹乱（瓦礫層）
第３層　黒灰色土（旧地表土）
第４層　暗灰色～暗灰茶色粘質土）
第５層　黄灰色～灰褐色粘質土
第６層　黄茶褐色粘質土
第７層　灰褐色粘質土
第８層　灰褐色混砂粘質土
第９層　暗褐色粘質土＋黄褐色粘土小塊
第10層　暗褐色混砂粘質土
第11層　明褐色粘質土
第12層　暗褐色粘質土＋灰褐色粘質土小塊
第13層　灰褐色粘質土
第14層　黄褐色～黄灰褐色粘土層
第15層　褐色～茶褐色粘質土
第16層　褐色～黄茶褐色粘質土
第17層　黄褐色～黄茶褐色砂土層
第18層　黒灰色砂質土（白色粘土小塊を多く含む）
第19層　暗灰色層（木炭片・土師器片を含む
第20層　灰色砂層
第21層　黒灰色～黒色粘土層
第22層　黄褐色粘質土＋暗褐色土
第23層　暗灰褐色粘質土
第24層　黄褐色粘質土
第25層　黒褐色粘質土（柱穴埋土）
第26層　茶褐色粘質土（柱穴埋土）
第27層　黒褐色混砂粘質土
第28層　黄褐色粘質土（基盤層）

（※アミカケ部分は現代撹乱）

0　1　6m

第11図　第５次調査区遺構平面及び土層断面図(1/80)



第12図　第１次・５次調査区遺構配置図(1/250)

出土。皿又は盤の底部片と思われる36の内外面には，ヘラ書きによる「寺」の銘がある。坏身37は基底部で出土。32は鞴羽口片で，小口端部の周りに炭化物が付着する。平瓦38・39は凸面に縄目叩痕が，41・42には格子目叩痕が残る。各瓦の内面には桶板痕及び布目痕が残る。丸瓦40は玉縁部分の破片で，凸面には縄目叩痕が残る。

土坑 SK02　長さ1.02m，幅0.68m，深さ0.1～0.15m を測る。遺物包含層を切っている。埋土は暗灰褐色粘質土で木炭片，赤褐色の焦土小塊を含む。南壁面は火を受け硬化し赤褐色。鍛冶炉の可能性がある。遺物には，土師器坏45，皿46，甕47の他，瓦片が出土している。

土坑 SK03　長さ1.1m，幅0.79m，深さ0.08～0.10m を測る。埋土は暗灰褐色～暗褐色粘質土で木炭片を若干含む。溝 SD01を切っている。

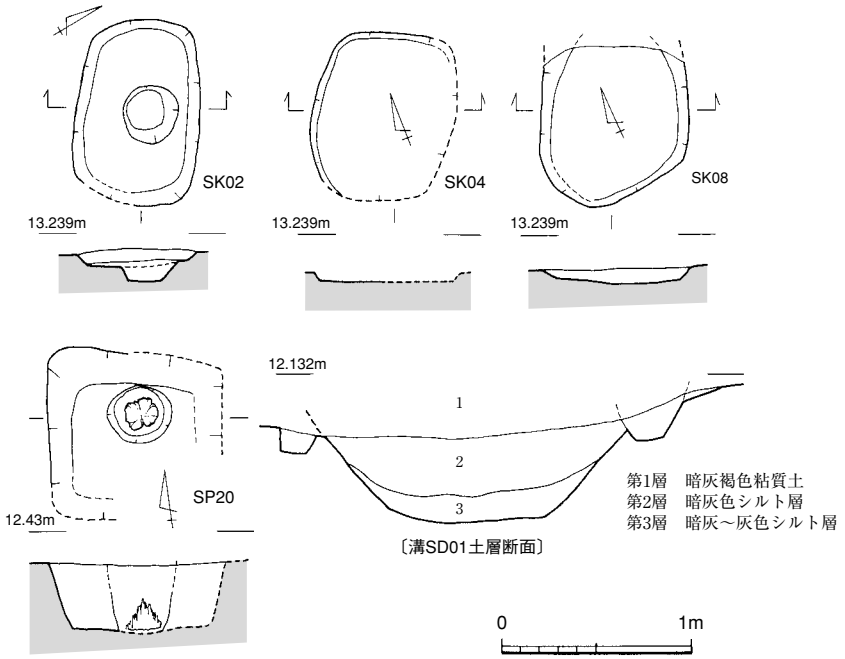
土坑 SK04　長さ0.93m，幅0.76m，深さ0.08m を測る。上部をかなり削平されており基底部のみ遺存している。埋土は暗灰褐色～暗褐色粘質土で，溝 SD01を切っている。遺物には，土師器椀48が出土している。

柱穴　柱穴は54検出した。分布は１区に偏っており，特に溝 SD01北側に分布密度が濃い。方形掘形を有する SP01・21以外はほとんどが直径0.2～0.4m の不整な円形掘形である。SP01・21は一辺約0.9m の方形掘形で，1次調査１号建物柱掘形の規模に等しい。SP21には，現存直径0.25m の柱根が残る。樹種はカヤである。なお柱穴群については調査段階で建物復元を試みたが，調査区が狭小なため，柱間の関連づけはできなかった。SP01からは，平瓦43，瓦磚44，土師器坏49が出土。43は凸面に格子目叩痕が，44には板目痕が残る。SP08からは土師器椀50が，SP16からは土師器甕51が出土している。

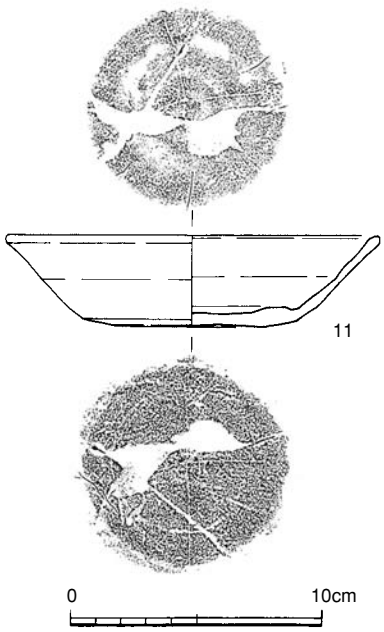
調査区北東側に分布する遺物包含層からは，土師器皿52･53，高台付皿61，坏54～56，椀57～60，甕62～65，甕又は甑の取っ手片66～68，高台付盤69，須恵器皿70，椀71，坏72，鉢73が出土している。

２）小結

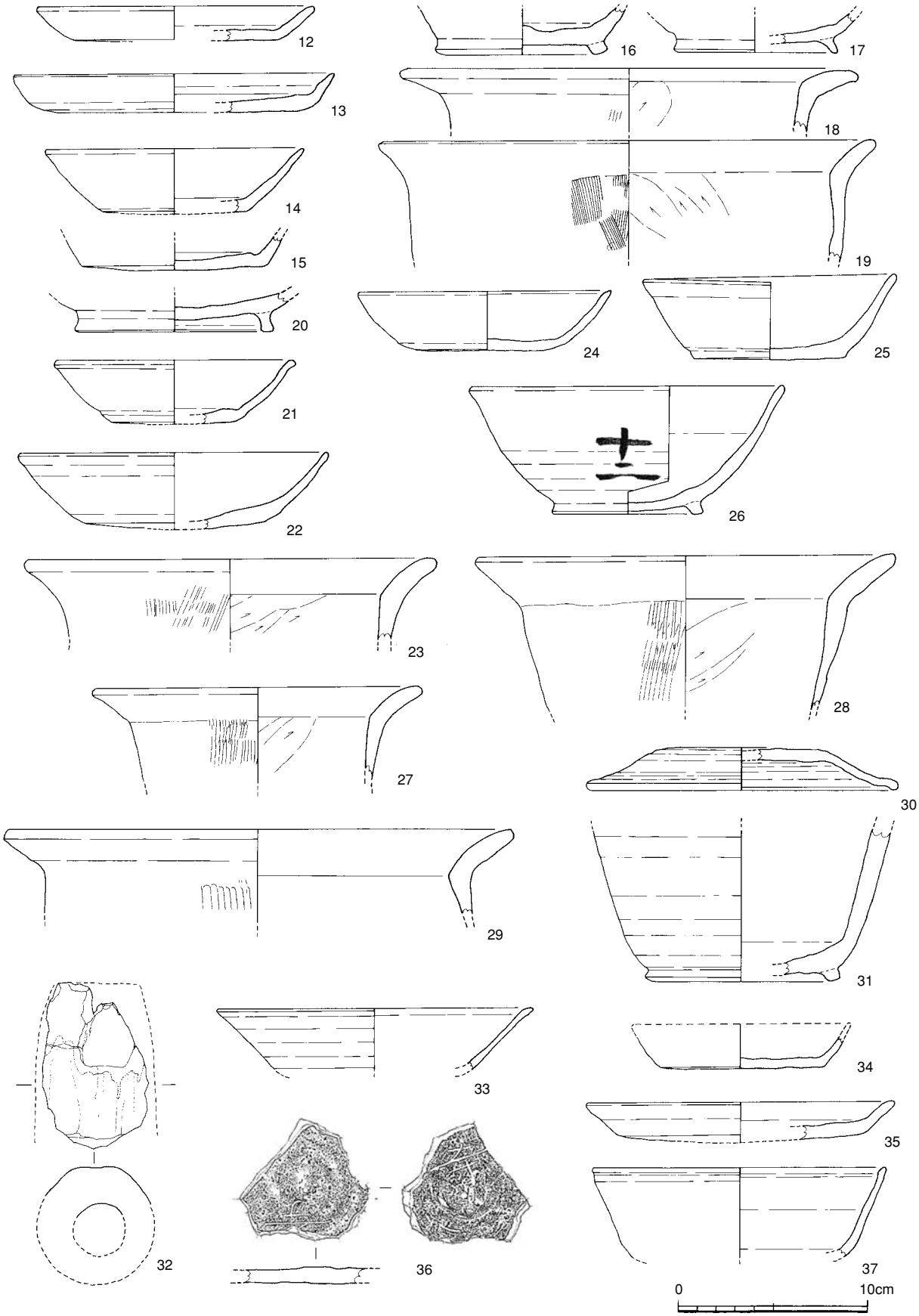
本調査区では第１次調査１号溝と７号溝の延長部と考えられる SD01・02の他，SK01等の遺構が比較的良好な遺存状況で確認された。これらの遺構は切り合い関係からみて大きく４期に区分できる。すなわち，１期は SD01が設定掘削される時期，ほどなく SK01が掘削される。２期は新たに SD02・03が設定される時期，３期は北東部包含層の形成時期，4期が包含層形成後掘削された SK02・03が設けられる時期である。柱穴群は，2期～４期にまたがるものと思われる。各期の時期については，第１次調査成果及び出土遺物からみて，１～２期が８世紀半ば～末，3～４期が９世紀半ばまでと推定できる。



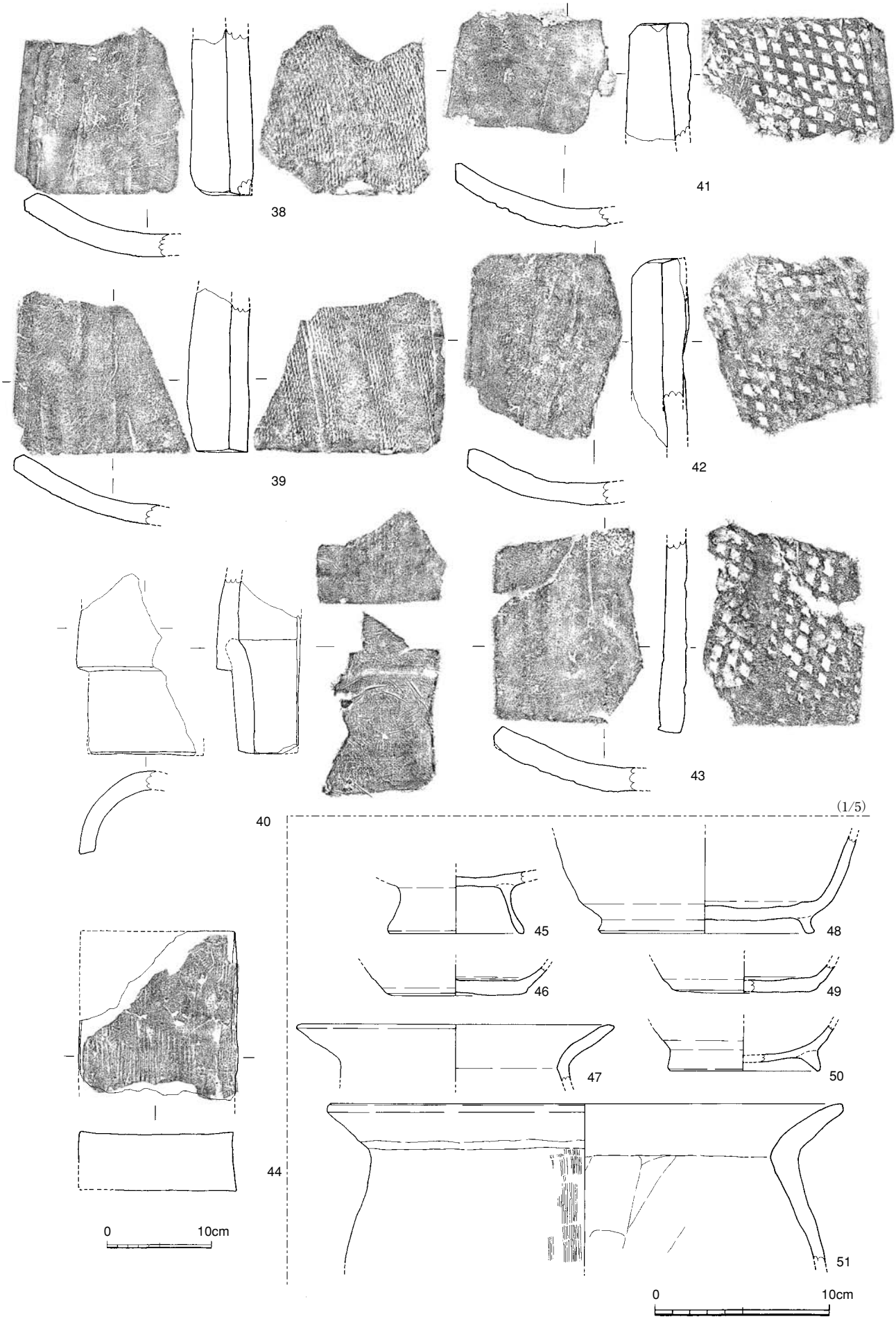
第13図　土坑 SK02・04・08，柱穴 SP20，溝 SD01平面及び断面図(1/40)



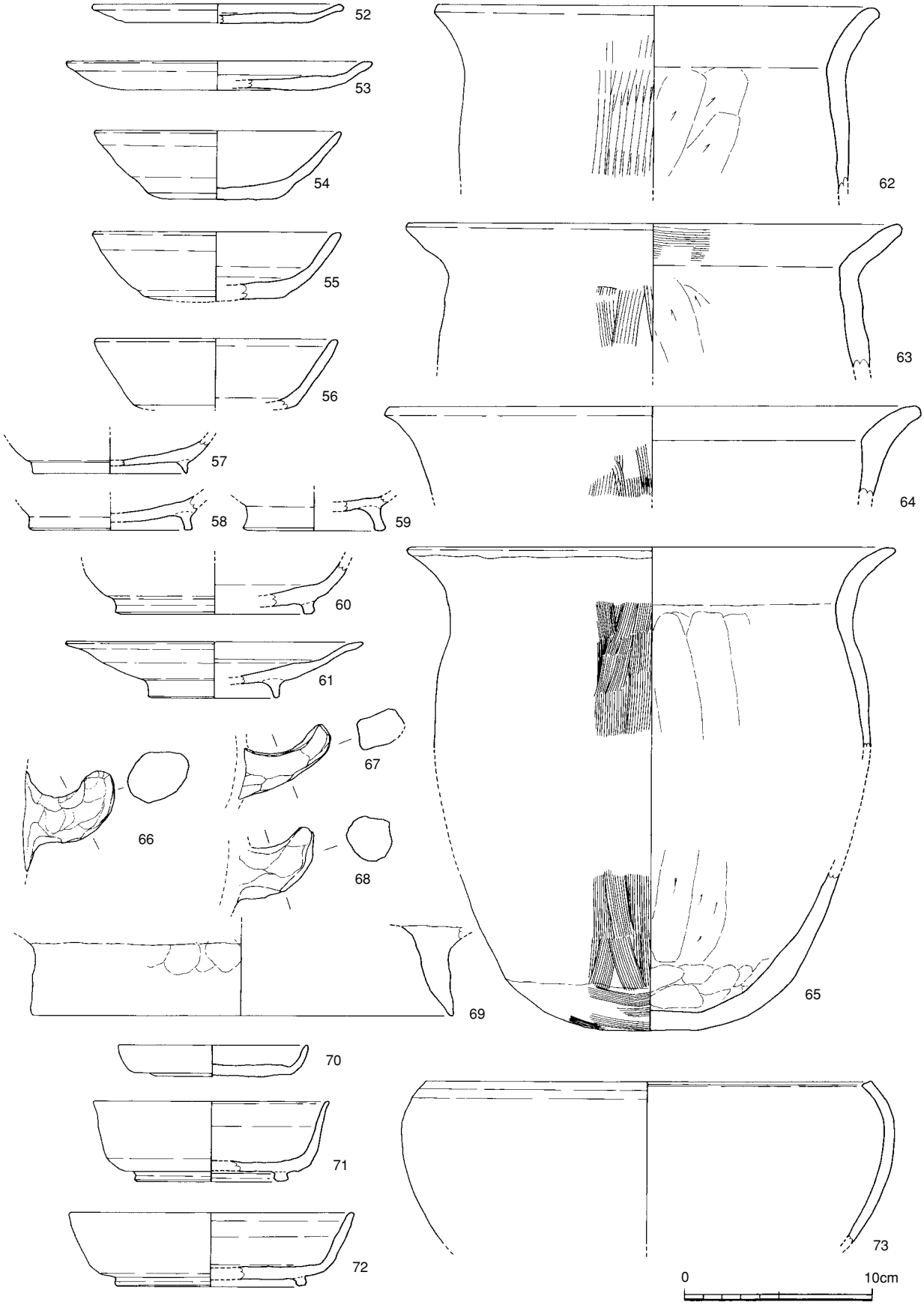
第14図　第５次調査区出土遺物実測図（1）（1/3）



第15図　第５次調査区出土遺物実測図（2）（1/3）



第16図　第５次調査区出土遺物実測図（3）（1/5・1/3）



第17図　第５次調査区出土遺物実測図（4）（1/3）

表２　掲載遺物観察所見一覧表（第５次調査）

掲載番号	遺構・層名 遺構	遺構・層名 層位	遺物名 種類	遺物名 器種	部位	法量（cm）				胎土	焼成	色調	器面調整・成形上の特徴	備考
11	溝SD01	第１層（暗灰褐色シルト層）	土師器	坏	口縁～体部片	口径	15.0	—	—	０.５mm前後の砂粒を若干含む。精良	軟質・焼締まり弱く，脆い	灰白色	底部から体部下部まで回転ヘラケズリ	内外底面に「十」字形のヘラ書きがある。
						器高	3.6	—	—					
						底径	9.0	—	—					
12	溝SD01	第１層（暗灰褐色シルト層）	土師器	皿	口縁部～底部破片	口径	14.6	—	—	微細な石英砂含む。精良	軟質・焼締まり弱く，脆い	赤みがかった褐色	回転ナデか。切り離し方法は不明。	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	1.9	—	—					
						底径	10.4	—	—					
13	溝SD01	第１層（暗灰褐色シルト層）	土師器	皿	口縁～底部片	口径	16.8	—	—	微細な雲母・石英砂含む。精良。	軟質・脆い	褐色	底部回転ヘラケズリか	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	1.9	—	—					
						底径	13.0	—	—					
14	溝SD01	第１層（暗灰褐色シルト層）	土師器	坏	口縁部～底部破片	口径	13.6	—	—	０.５mm前後の砂粒を若干含む。精良。	軟質・焼締まり弱く，脆い	褐色	回転ナデ	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	3.3	—	—					
						底径	7.6	—	—					
15	溝SD01	第１層（暗灰褐色シルト層）	須恵器	瓶？	底部片	口径	—	体部径	—	きめ細かく精緻	良く焼き締まり，硬質	灰色	底部は回転ヘラキリ後ナデ	—
						器高	—	—	—					
						底径	9.9	—	—					
16	溝SD01	第１層（暗灰褐色シルト層）	土師器	高台付坏	高台部片	口径	—	体部径	—	微細な石英砂・長石砂をむくむく。精良	軟質・焼き締まり弱く，脆い	褐色	—	—
						器高	—	高台径	9.0					
						底径	—	高台高	0.9					
17	溝SD01	第１層（暗灰褐色シルト層）	土師器	高台付坏	高台部片	口径	—	体部径	—	きめ細かく精良。	軟質・脆い	明灰褐色	内外面とも回転ナデ	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	—	高台径	8.6					
						底径	—	高台高	0.7					
18	溝SD01	第１層（暗灰褐色シルト層）	土師器	甕	口縁部片	口径	24.2	体部径	—	０.５～２.０mm の石英砂を多く含みややきめ粗い。	焼き締まっており，やや硬質	内面　灰褐色 外面　明褐色	内面　縦ヘラケズリ 外面　縦刷毛目	—
						器高	—	頸部径	18.8					
						底径	—		—					
19	溝SD01	第１層（暗灰褐色シルト層）	土師器	甕	口縁部片	口径	26.1	体部径	22.6	０.５～１.０mm の石英砂を多く含み，ややきめ粗い。	軟質・焼き締まり弱く，脆い	褐色～暗褐色	内面縦ヘラケズリ 外面縦刷毛目	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	—	頸部径	21.6					
						底径	—		21.4					
20	土坑SK01	14層	土師器	高台付椀	底部片	口径	—	体部径	—	０.５～２.０mm の石英砂を含みややきめ粗い。	焼締まり弱く，脆い。軟質	褐色	内面　回転ナデ 外底　ヘラ切り離し後高台	—
						器高	—	高台径	10.6					
						底径	—	高台高	1.0					
21	土坑SK01	14層	土師器	坏	口縁～底部片	口径	12.9	—	—	０.５mm前後の砂粒を若干含む。精良	軟質・焼しまり弱く，脆い	灰褐色～灰白褐色	内外面とも回転ナデ。底部回転ヘラキリ離し	内外面一部に油煙煤付着
						器高	3.3	—	—					
						底径	6.5	—	—					
22	土坑SK01	14層	土師器	坏	口縁～底部片	口径	16.3	—	—	０.５～１.０mm の石英砂を含む。精良	軟質・焼しまり弱く，脆い	明褐色	内外面とも回転ナデ。底部回転ヘラキリ離し	—
						器高	4.1	—	—					
						底径	9.5	—	—					
23	土坑SK01	14層	土師器	甕	口縁部片	口径	23.8	体部径	—	０.５～２.０mm の石英砂を多く含みきめ粗い。	焼き締まりやや弱く，脆い	外面　黒褐色 内面　灰褐色	内面　斜めヘラケズリ 外面　縦刷毛目	—
						器高	—	頸部径	22.3					
						底径	—	—	—					
24	土坑SK01	第18層（灰白色，黄白色混合層）	土師器	坏	口縁～底部片	口径	13.2	—	—	０.５～１.０mm の石英砂を含む。精良	軟質・焼しまり弱く，脆い	灰白褐色	内外面　回転ナデ 底部回転ヘラケズリ	口縁端部に油煙煤付着
						器高	3.1	—	—					
						底径	8.6	—	—					
25	土坑SK01	第18層（灰白色，黄白色混合層）	土師器	坏	完形	口径	13.5	—	—	０.５～１.０mm の石英砂を多く含む。精良。	軟質・焼しまり弱く，脆い	灰白褐色	内外面とも回転ナデ。底部回転ヘラキリ離し	—
						器高	4.3	—	—					
						底径	8.3	—	—					
26	土坑SK01	第18層（灰白色，黄白色混合層）	内黒土器	高台付椀	口縁～底部片	口径	16.7	—	—	微細な白色砂含む。精良	焼き締まっており，やや硬質	内面　黒色 外面　明褐色	内面　斜めヘラケズリ 外面　縦ハケ目	体部外面に「十二」又は「寺」墨書
						器高	6.7	高台径	8.0					
						底径	—	高台高	0.7					
27	土坑SK01	第18層（灰白色，黄白色混合層）	土師器	甕	口縁部片	口径	17.6	体部径	13.4	１.０mm前後の砂粒含む。ややきめ粗い	焼締まり弱く，脆い	内面　黒褐色 外面　褐色	内面　斜めヘラケズリ 外面　縦ハケ目	—
						器高	—	頸部径	13.4					
						底径								
28	土坑SK01	第18層（灰白色，黄白色混合層）	土師器	甕	口縁部片	口径	22.5	体部径	17.2	０.５～２.０mm の石英砂を多く含みややきめ粗い。	焼締まり弱く，脆い	内面　淡赤褐色 外面　黒褐色	内面　斜めヘラケズリ 外面　縦ハケ目	—
						器高	—	頸部径	17.2					
						底径	—	—	—					
29	土坑SK01	第18層（灰白色，黄白色混合層）	土師器	甕	口縁部片	口径	27.0	体部径	—	０.５～１.０mm の石英砂を多く含む。精良	焼き締まりやや弱く，脆い	灰色～灰褐色	内面　斜めヘラケズリ 外面　縦ハケ目	—
						器高	—	頸部径	22.3					
						底径								
30	土坑SK01	第18層（灰白色，黄白色混合層）	須恵器	蓋	天井～口縁部片	口径	16.5	—	—	０.５mm前後微砂含む。精良	良く焼き締まり，硬質	灰色	内外面　回転ナデ 天井部　回転ヘラ	—
						器高	2.2	—	—					
						天井部	9.0	—	—					
31	土坑SK01	第18層（灰白色，黄白色混合層）	須恵器	高台付壺？	口縁～底部片	口径	—	体部径	—	微細な石英砂粒含む。精良	良好。良く焼き締まり，硬質	灰色	内面回転ナデ，外面ヘラケズリ	—
						器高	—	高台径	10.0					
						底径		高台高	0.7					
32	土坑SK01	第20層（灰色～暗灰色粘質土層）	土製品	羽口	小口部	口径	4.5～		—	微細な砂粒を含む。精良	良く焼き締まっており，硬質	赤紫～赤褐色	内面　ナデ	小口端部には黒色炭化物が付着
						現存長	8.8	—	—					
						孔径	2.8	—	—					
33	土坑SK01	第20層（灰色シルト層）	土師器	坏	口縁部～底部破片	口径	16.6	—	—	０.５mm前後の砂粒を若干含む。精良。	軟質・焼締まり弱く，脆い	灰白褐色	回転ナデ	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	3.7	—	—					
						底径	9.2	—	—					
34	土坑SK01	第20層（灰色～暗灰色粘質土層）	土師器	坏又は皿	体部～底部片	口径	11.7	—	—	きめ細かく，精良	焼締まり弱く，脆い。軟質	灰白褐色	内外面　回転ナデ 底部回転ヘラ切り離し	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	2.3～	—	—					
						底径	8.8	—	—					
35	土坑SK01	第18層	土師器	皿	口縁～底部片	口径	16.0	—	—	０.５mm前後の石英砂を含みややきめ粗い。	焼き締まり，やや硬質	黒褐色	内外面とも回転ナデ。底部回転ヘラキリ離し後ナデ	—
						器高	2.1	—	—					
						底径	12.8	—	—					
36	土坑SK01	第20層（灰色シルト層）	須恵器	皿又は盤	底部片	口径	—	—	—	０.５～１.０mm の石英砂を多く含む。精良	良く焼き締まっており，硬質	灰～暗灰色	外底は回転ヘラ切り離し，内面は横ナデ	内外底に「寺」
						器高	—	—	—					
						底径	—	—	—					
37	土坑SK01	第18層	須恵器	坏	口縁～体部片	口径	15.6	体部径		微細な砂粒を含む。精良	良く焼き締まっており，硬質	灰色	内外面　回転ナデ	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	4.9	高台径						
						底径	10.0～	高台高						
45	土坑SK02	暗～黒灰褐色粘質土	土師器	高台付椀	底部片	口径	—	体部径	—	０.５mm前後の砂粒を若干含む。精良。	軟質・焼締まり弱く，脆い	赤褐色	内底部ナデ，高台部回転ナデ	—
						器高	—	高台径	7.8					
						底径	—	高台高	2.6					
46	土坑SK02	暗～黒灰褐色粘質土	土師器	坏	底部片	口径	—	—	—	０.５～２.５mm の石英砂を含む。精良	軟質・焼締まり弱く，脆い	褐色	底部回転ヘラキリ	—
						器高								
						底径	8.1	—	—					
47	土坑SK02	暗～黒灰褐色粘質土	土師器	甕	口縁部片	口径	20.2	体部径	—	０.５～２.５mm の石英砂，雲母片を含む。赤褐色班，精良	軟質・焼締まり弱く，脆い	明褐色	内面　斜めヘラケズリ 外面　縦刷毛目	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	—	頸部径	13.0					
						底径	—	—	—					
48	土坑SK04	暗茶褐色粘質土	土師器	高台付椀	体部～底部片	口径	—	体部径	—	０.５～１.０mm の石英砂を多く含む。精良。	軟質・焼き締まり弱く，脆い	明褐色	内外面とも回転ナデ	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	—	高台径	12.3					
						底径	14.1	高台高	0.9					
49	柱穴SP01	暗茶褐色粘質土	土師器	坏	底部片	口径	—	—	—	１.０mm前後の砂粒を含む。ややきめ粗い。	焼締まり弱く，脆い。軟質	暗褐色	—	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	—	—	—					
						底径	8.2	—	—					
50	柱穴SP08	暗褐色粘質土	土師器	高台付椀	底部片	口径	—	体部径	—	微細な砂粒を含む。精良。赤褐色班みられる	焼締まり弱く，脆い。軟質	明褐色	内外面とも横ナデ	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	—	高台径	8.8					
						底径	—	高台高	1.2					
51	柱穴SP16	暗褐色粘質土	土師器	甕	口縁～体部片	口径	29.4	体部径	27.4～	０.５～２.５mm の石英砂・角センセキを含む。ややきめ粗い	良く焼き締まっており，硬質	灰白褐色	内面　斜めヘラケズリ 外面　縦刷毛目	—
						器高	—	頸部径	24.4					
						底径	—	—	—					
52	—	北東側包含層	土師器	皿	口縁～底部片	口径	13.2	—	—	微細な石英砂含む。精良	軟質・焼しまり弱く，脆い	やや赤みがかった褐色	回転ナデ	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	1.1	—	—					
						底径	9.6	—	—					
53	—	北東側包含層	土師器	皿	口縁～底部片	口径	16.3	—	—	０.５～２.０mm の石英砂を多く含みややきめ粗い。	良く焼き締まっており，硬質	明褐色	—	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	1.5	—	—					
						底径	9.9	—	—					
54	—	北東側包含層	土師器	坏	口縁～底部片	口径	13.1	—	—	１.０mm前後の石英砂をわずかに含む。茶褐色班あり。精良	軟質・脆い	灰白褐色	底部回転切り離し	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	3.6	—	—					
						底径	7.3	—	—					
55	—	北東側包含層	土師器	坏	口縁～底部片	口径	13.1	—	—	１.０mm前後の砂粒をわずかに含む。茶褐色班あり。精良	軟質・脆い	明褐色～褐色	底部回転切り離し	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	3.8	—	—					
						底径	8.0	—	—					
56	—	北東側包含層	土師器	坏	口縁～底部片	口径	12.9	—	—	きめ細かく泥質。精良。赤褐色班みられる。	軟質・焼しまり弱く，脆い	明黄褐色	—	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	3.8～	—	—					
						底径	8.6	—	—					
57	—	北東側包含層	土師器	高台付椀	高台部片	口径	—	体部径	—	微細な砂粒・雲母片を含む。精良	軟質・焼しまり弱く，脆い	明褐色	内底部　横ナデ	—
						器高	—	高台径	8.0					
						底径	—	高台高	0.6					
58	—	北東側包含層	土師器	高台付椀	高台部片	口径	—	体部径	—	微細な砂粒・雲母片を含む。精良	軟質・焼しまり弱く，脆い	やや赤みがかった明褐色	内底部　横ナデ	—
						器高	—	高台径	8.9					
						底径	—	高台高	0.8					
59	—	北東側包含層	土師器	高台付坏	高台部片	口径	—	体部径	—	微細な石英砂含む。精良	軟質・焼しまり弱く，脆い	明褐色	内外面ともナデ	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	—	高台径	7.6					
						底径	—	高台高	1.2					
60	—	北東側包含層	土師器	高台付椀	底部片	口径	—	体部径	—	０.５～１.０mm の石英砂を含む。精良	軟質・焼しまり弱く，脆い	明褐色	内外面とも回転ナデ。	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	—	高台径	10.4					
						底径	—	高台高	0.8					
61	—	北東側包含層	土師器	高台付皿	口縁～底部片	口径	15.8	体部径	—	微細な石英砂含む。精良。茶褐色班多い	軟質・焼しまり弱く，脆い	明褐色	内外面とも回転ナデ	器面は磨耗し，調整痕は不明瞭
						器高	3.0	高台径	6.8					
						底径	—	高台高	0.9					
62	—	北東側包含層	土師器	甕	口縁部片	口径	23.6	体部径	—	０.５～２.０mm の石英砂を多く含む。	良く焼き締まっているが，やや軟質で，脆い。	明褐色，外面の一部に黒班	内面　縦ヘラケズリ 外面　縦～斜め刷毛目	—
						器高	—	頸部径	20.2					
						底径	—		—					
63	—	北東側包含層（暗褐色粘質土）	土師器	甕	口縁部片	口径	27.0	体部径	23.0～	０.５～１.０mm の石英砂を多く含みきめ粗い。	やや軟質・焼き締まっておらず，脆い	灰褐色～黒灰褐色	内面縦ヘラケズリ 外面縦刷毛目	外面に黒色のコゲ付着
						器高	—	頸部径	21.6					
						底径	—		—					
64	—	北東側包含層	土師器	甕	口縁部片	口径	28.4	体部径	—	０.５～２.０mm の石英砂を多く含む。	良く焼き締まっているが，やや軟質で，脆い。	灰褐色	内面　縦ヘラケズリ 外面　縦～斜め刷毛目	口縁部に炭化煤付着
						器高	—	頸部径	23.4					
						底径	—		—					
65	—	北東側包含層（暗褐色粘質土）	土師器	甕	口縁部～底部破片	口径	26.0	体部径	23.2～	０.５～２.０mm の石英砂を多く含みややきめ粗い。	やや軟質・焼き締まっておらず，脆い	明褐色	内面縦ヘラケズリ 外面縦刷毛目	外面に黒色班あり
						器高	29～	頸部径	21.3					
						底径	—		—					
66	—	北東側包含層	土師器	甑又は甕	取手部片	口径	—	体部径	2.6~3.5	０.５～２.０mm の石英砂を多く含みややきめ粗い。	良く焼き締まっており，硬質	褐色	ナデツケ	—
						器高	—	—	—					
						底径	—	—	—					
67	—	北東側包含層	土師器	甑又は甕	取手部片	取っ手径		1.6×2.8		０.５～２.０mm の石英砂を多く含みややきめ粗い。	良く焼き締まっているが，やや軟質で，脆い。	灰褐色	指ナデツケ	—
68	—	北東側包含層	土師器	甑又は甕	取手部片	取っ手径		2.4×2.5		０.５～２.０mm の石英砂を多く含みややきめ粗い。	良く焼き締まっているが，やや軟質で，脆い。	灰白褐色	指ナデツケ	—
69	—	北東側包含層	土師器	脚台付盤	脚台部	口径	—	体部径	—	１.０～２.０mm の石英砂を多く含みややきめ粗い。	良く焼き締まっているが，やや脆い	茶褐色	ナデ（指頭圧痕残る）	—
						器高	—	高台径	22.4					
						底径	—	高台高	3.5					
70	—	北東側包含層	須恵器	皿	口縁～底部片	口径	10.1	—	—	きめ細かく泥質。精良。黒色班みられる。	良好。良く焼き締まり，硬質	灰～灰白色	内外面とも回転ナデ。内底部横ナデ。回転ヘラキリ離し	—
						器高	1.1	—	—					
						底径	8.4		—					
71	—	北東側包含層	須恵器	高台付椀	口縁～底部片	口径	12.4	体部径		きめ細かく泥質。精良。黒色班みられる。	良好。良く焼き締まり，硬質	灰色	体部下部から高台内底は回転ヘラケズリ	—
						器高	4.2	高台径	8.1					
						底径	—	高台高	0.5					
72	—	北東側包含層	須恵器	高台付坏	口縁～底部片	口径	14.9	体部径	—	きめ細かく泥質。精良	良好。良く焼き締まるが，やや軟質	灰色	内外面とも回転ナデ。内底部横ナデ。底部回転ヘラキリ離し	—
						器高	3.9	高台径	9.9					
						底径	12.1	高台高	0.6					
73	—	北東側包含層	須恵器	鉢	口縁～体部片	口径	23.8	体部径	26.2	きめ細かく泥質。精良	良く焼き締まっているが，やや軟質	灰白色	内面回転ナデ 外面ヘラミガキ	—
						器高	11～	—	—					
						底径	—	—	—					

Ⅳ．結　語

前章で調査所見について述べてきたが，以下では今回の調査結果を踏まえながら若干の考察を加えまとめとしたい。

１．調査結果

１）第３次・４次調査区では，これまでの調査で検出された奈良時代に相当する遺構として２条の溝を確認し，当該期の遺構が，長池の土手近辺まで広く展開していることが明らかとなった。さらに長池内にも存在する可能性がある。

２）第５次調査区では，第１次１号溝，7号溝の延長部がそれぞれ確認できた他，大型建物の存在を想定しうる柱穴，および土坑等を確認でき，北西側から北側に隣接する台地際まで遺構が展開していることがわかった。なお切り合い関係からみてこれらの遺構は大きく４時期に区分することができた。各遺構からの出土遺物は，おおむね８世紀半ば～９世紀前半代におさまることから，１・２期が奈良時代，３・４期が平安時代以降と考えられた。

３）第５次調査の２）の結果，本来東南東に延びていた丘陵尾根裾部の造成工事が，少なくとも奈良時代までには行われ，山際まで平坦化されていたことがわかった。なお隣接する台地との現状における比高差は最大で約５ｍあり，かなり大規模な造成が施工されたことが推定される。

４）第３・４次と第５次調査区における遺構検出面は，順に12.8～13.2m，13.2～13.4m，11.8～12.1mであり，東西間約120m以上の距離をもって約１ｍ前後の比高差がある。本来は狭隘な谷が入り組んでいたであろう当該地点に，ほとんど高低差がない平坦面が存在していたことが考えられる。

２．これまでの調査成果からみた検出遺構の配置

昭和52年度に実施された第１次調査によって三宅廃寺の寺域範囲は，調査区の西南部で検出した溝のコーナーを方形地割の北東角とみなし，古瓦の分布や地形のあり方からみて一辺100～110m規模を想定した。位置については，旧南大橋団地敷地を中心として三宅１号公園にかかる範囲が考えられている。築造時期は，老司式瓦の年代観から７世紀後半から８世紀前半と想定し，一方，第１次調査区で検出された１号溝と11号溝をのぞいた溝群と１号・２号建物および溝群については，中心施設周縁部に配された遺構と考え８世紀後半～９世紀代とした。これらから，三宅廃寺そのものの存続期間を７世紀後半から９世紀代にかかると考えた。(注)

今回の調査地点は，この推定が正しいとすると，第３次および第４次調査区がこの推定域の西側，第５次調査区が北東側に位置し，それぞれ周縁部分に相当することになる。以下では，今回確認された各遺構の配置についてみてみる。

第１次から今回までの調査で検出された各遺構の方位角度は，磁北を基準とすると，大きく２グループに分かれる。Ａグループは磁北からＮ-９°-Ｅをとる遺構群で，これにほぼ並行もしくは直交する第３次溝SD01，第１次１号溝およびその延長部の第５次溝SD01，第２次溝SD01である。これらは次のＢグループに先行するものである。Ｂグループは，磁北または磁北から±１°前後東西に振れるまたはこれに直交する遺構群で，第４次SD01，第５次SD02・03，第１次及び第２次調査の建物及びこれに付属する溝群が該当する。これらから，第３～５次調査で確認された遺構は，一連の平面企画で配された遺構群であることが理解できる。

ところで，Ａ群で注目されるのは，約100mほど離れた地点に位置する第１次SD01，第５次SD01と第２次SD02がほぼ直交する点である。初期の段階の方形地割りを物語るものと考えられるが，当該期の建物等の遺構はこれまでの調査では確認できていない。Ｂグループの遺構群は若干の振れはあるもののほぼ磁北を軸とし，きわめて整然とした平面企画の下で諸施設が配置されたことが想起されるが，第１次調査で確認され三宅廃寺推定の根拠となった瓦溜遺構と呼ばれた溝状遺構は，これらの平面企画からはずれているように見える。当該溝の延長部および中心的施設部分の調査が不十分な現段階では，三宅廃寺の存否および場所の比定については，いましばらく周辺調査の増加を待って検討する余地があると考えられ，今後の調査に期待したい。

(注) 福岡市教育委員会　1979 『三宅廃寺』福岡市埋蔵文化財調査報告書第50集

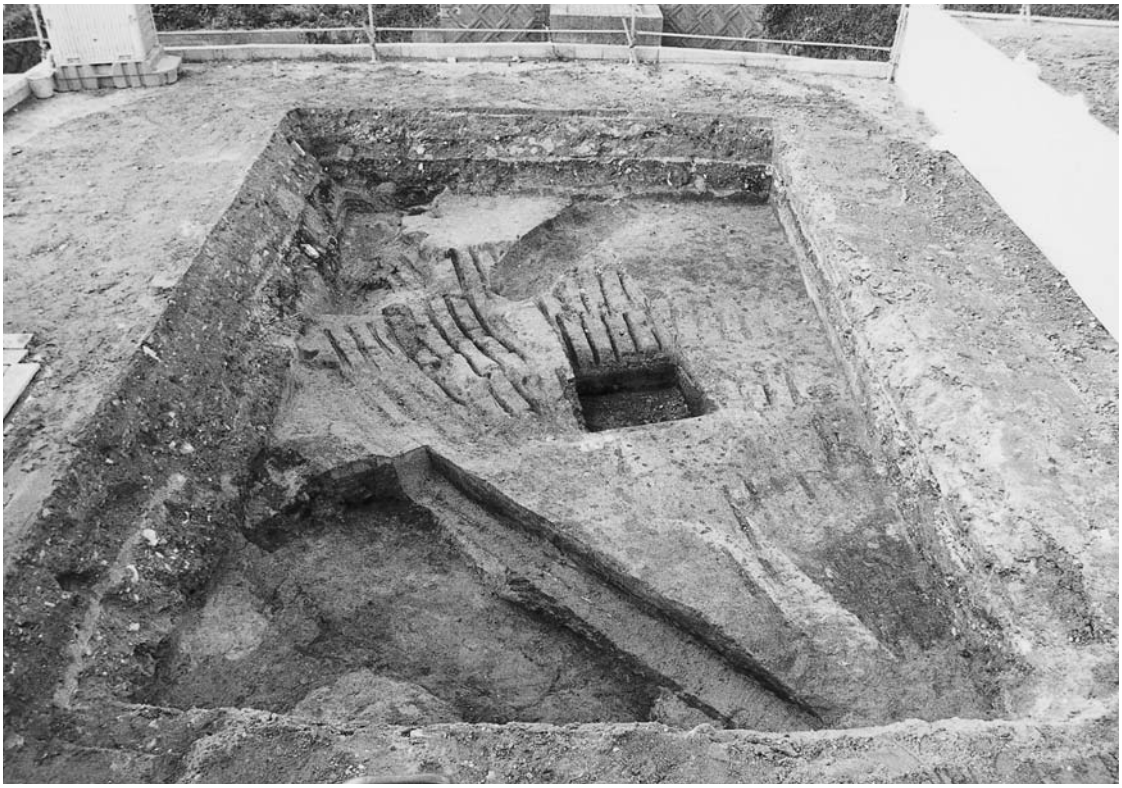
図　　版

三宅周辺航空写真（昭和53年当時　東から）

(1) 第 3 ・ 4 次調査区調査前現況(北から)

(2) 第 5 次調査区調査前現況(南西から)

（1）第 3 次調査区完掘状況（南東から）



（2）第 4 次調査区完掘状況（南東から）

（1）第 5 次調査第 1 区完掘状況（南西から）

（2）完掘状況（南南西から）

（3）土坑 SKO 2（南南東から）

（4）土坑 SK01（東から）

（5）土坑 SK08（南南西から）

(1) 第 5 次調査第 2 区完掘状況(南西から)

(2) 溝 SD03(南から)

(3) 柱穴 SP20(北から)

(4) 第 3 次埋め戻し状況

(5) 第 4 次埋め戻し状況

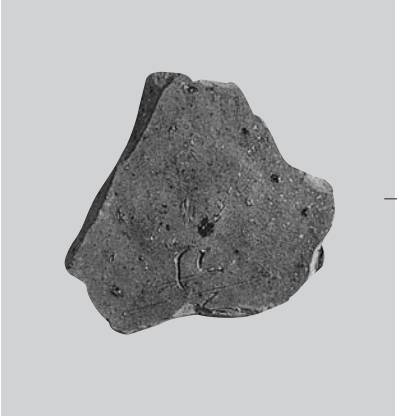
(6) 第 5 次埋め戻し状況

24

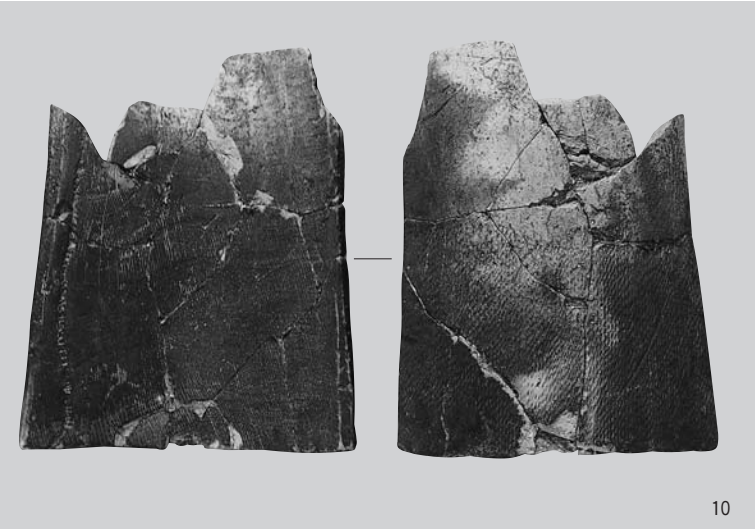
25

26

44



36


10

報告書抄録

ふりがな	みやけはいじ
書名	三宅廃寺３
副書名	個人専用住宅建設に伴う三宅廃寺第３～５次調査の報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第827集
編著者名	田中壽夫
編集機関	福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
所在地	〒810－8620　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2004年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みやけはいじ 三宅廃寺 第３次調査	ふくおかけんふくおかしみなみく 福岡県福岡市南区 おおはし 大橋１丁目1157－7	40134	0144	33° 33′ 1′′	130° 25′ 28′′	2002年 11月28日～ 12月16日	63.8㎡	個人専用 住宅建設
みやけはいじ 三宅廃寺 第４次調査	ふくおかけんふくおかしみなみく 福岡県福岡市南区 おおはし 大橋１丁目1157－8	40134	0144	33° 33′	130° 25′ 27′′	2002年 12月17日～ 12月26日	72.7㎡	個人専用 住宅建設
みやけはいじ 三宅廃寺 第５次調査	ふくおかけんふくおかしみなみく 福岡県福岡市南区 おおはし 大橋１丁目1157－3	40134	0144	33° 33′ 2′′	130° 25′ 30′′	2002年 12月18日～ 2003年 １月８日	92.7㎡	個人専用 住宅建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三宅廃寺 第３次調査	寺院跡	奈良時代 平安時代	溝１　柱穴２	須恵器　土師器　瓦 土師器　瓦	
三宅廃寺 第４次調査	寺院跡	奈良時代 平安時代	溝２　柱穴２	須恵器　土師器 瓦	
三宅廃寺 第５次調査	寺院跡	奈良時代 平安時代	溝３　柱穴54　土坑４	須恵器　土師器　瓦 須恵器　土師器　墨書 土器　瓦	

三宅廃寺３

－福岡市埋蔵文化財調査報告書第８２７集－

発行年　2004年３月31日

発行者　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８番１号

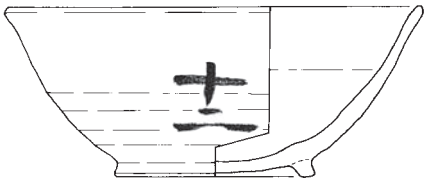
印　刷　高松印刷有限会社

福岡市東区松島１丁目４－10

Miyake haiji 3

— The 3rd ～ 5th excavation Results of the ruins of ancient temple "Miyake haiji" —

Cultural property investigation report of Fukuoka city, Vol.827



2004

The Boards of Education of Fukuoka city